

平成 1 6 年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館

実績報告書

目 次

東京国立近代美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	
1. 収集・保管	6
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	6
(2) 保管の状況	8
(3) 修理の状況	10
2. 公衆への観覧	12
(1) 展覧会の状況	12
本館	15
「常設展」	15
「国吉康雄」展（共催展）	18
「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展（企画展）	21
「琳派 RIMPA」（共催展）	24
「木村伊兵衛」展（共催展）	27
「草間彌生 - 永遠の現在」（企画展）	29
「痕跡 - 戦後美術における身体と思考」展（企画展）	32
「ゴッホ」展（共催展）	35
工芸館	37
「常設展」	37
「非情のオブジェ - 現代工芸の11人」展（企画展）	39
「人間国宝の日常のうつわ - もう一つの富本憲吉」（企画展）	42
「河野鷹思のグラフィック・デザイン - 都会とユーモア」（企画展）	45
(2) 貸与・特別観覧の状況	47
3. 調査研究	48
4. 教育普及	50
(1) - 1 資料の収集及び公開（観覧）の状況	55
(1) - 2 広報活動の状況	57
(1) - 3 デジタル化の状況	61
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	63
(2) - 2 講演会等の事業	66
(3) - 1 研修の取組	71
(3) - 2 大学等との連携	72
(3) - 3 ボランティアの活用状況	74
(4) 渉外活動	76
5. その他の入館者サービス	78

東京国立近代美術館の概要

1. 目的

東京国立近代美術館は、昭和27年に日本で最初の国立美術館として開館した。当時は、先行するミュージアム施設としては国立博物館のみであり、従って当館は国立博物館に対して、広い意味で同時代の日本美術を常時展観できる近代美術館として性格づけられた。

当館は、竹橋に、本館及び工芸館、京橋にフィルムセンターを有し、世界の近代美術の流れの中で、わが国の近代美術の系譜を跡づけ、広く美術への関心を喚起することを目的として、企画展、常設展等の展覧事業のみならず、20世紀を中心とした近代の美術・工芸作品、映画フィルムや関連資料の収集・保存、内外の美術活動についての継続的な調査研究、教育普及、出版物の刊行等、幅広く事業を行っている。

2. 土地・建物

(1) 本館

建面積	4,511 m ²
延べ面積	17,192 m ²
展示面積	4,599 m ²
収蔵庫面積	1,840 m ²

(2) 工芸館

建面積	929 m ²
延べ面積	1,858 m ²
展示面積	568 m ²
収蔵庫面積	168 m ²

3. 定員（本館，工芸館） 43人（うち本部職員12人を含む。）

4. 予算 1,261,446,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

【東京国立近代美術館本館・工芸館】

実 績

1. 業務の一元化
本部において、これまでで行っている人事、共済、給与事務及び情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等（リサイクル）
 - (1) 光熱水量
本館
ア．電気 使用量 2,611,197kw（前年度比103.1%） 料金 37,472,403円（前年度比96.5%）
イ．水道 使用量 14,655m³（前年度比111.8%） 料金 8,089,575円（前年度比107.7%）
ウ．ガス 使用量 381,232m³（前年度比96.3%） 料金 16,600,564円（前年度比92.8%）
工芸館
ア．電気 使用量 354,289kw（前年度比96.8%） 料金 6,551,445円（前年度比93.6%）
イ．水道 使用量 1,025m³（前年度比105.7%） 料金 451,481円（前年度比105.0%）
 - (2) 廃棄物処理量
館内LANの活用による職員周知文書や会議開催案内によりペーパーレス化を実施した。
本館
観客の増加等により増加。
ア．一般廃棄物 14,700Kg（前年度比109.7%） 料金 308,700円（前年度比109.7%）
イ．産業廃棄物 5,930Kg（前年度比128.6%） 料金 205,474円（前年度比128.6%）
工芸館
観客の増加等により増加。
ア．一般廃棄物 5,090Kg（前年度比105.4%） 料金 106,890円（前年度比105.4%）
イ．産業廃棄物 1,190Kg（前年度比121.4%） 料金 41,233円（前年度比121.4%）
 - (3) その他 古紙の再利用、OA機器等のトナーカートリッジリサイクルによる再生使用
3. 施設の有効利用
講堂について、館の事業に差し支えない範囲で、外部への貸し付けを行った。
講堂等の利用率18%（66日/365日）
講演会等 24日
美術館レクチャー 10日
コンサート 4日
講堂貸出 28日

4. 外部委託

平成15年度に引き続いて下記の外部委託を行い業務の効率化を図った。今後も各業務の見直しを行い、外部委託の可能なものの検討を進めていく。

- | | |
|----------|------------------|
| 1 会場管理業務 | 6 収入金等集配業務 |
| 2 設備管理業務 | 7 レストラン運営業務 |
| 3 清掃業務 | 8 アートライブラリ運営業務 |
| 4 保安警備業務 | 9 ミュージアムショップ運営業務 |
| 5 機械警備業務 | |

5. O A化

館内LANの整備状況

館内LANは全館内に整備されており、各職員が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。館内LANは文書ファイルの共有、Eメールによる事務連絡に活用しており、事務の効率化を図った。

紙の使用量 762,000枚（前年度比99.5%）

- | | |
|-----|----------|
| A 4 | 637,500枚 |
| A 3 | 79,500枚 |
| B 4 | 30,000枚 |
| B 5 | 15,000枚 |

6. 一般競争入札

- | | |
|-------------|--|
| 1. 本館, 工芸館 | 一般競争入札件数 4件（総契約件数 65件）
（看土・発券・出札等業務, 設備管理業務, 清掃業務, 「ブラジル」展会場設営工事） |
| 2. フィルムセンター | 一般競争入札件数 6件（総契約件数 92件）
（会場管理等業務, 機械設備等保守管理業務, 清掃業務, 映写等請負業務, 映像機器追加設置工事, フィルム編集機システム） |

7. 評議員会

開催回数 2回（平成16年6月16日（水）/平成17年2月21日（水））

議事内容 平成16年度事業の実施状況, 平成17年度事業計画, 及び平成15年度事業の外部評価結果について報告。夜間開館日の増加等の入館者サービスの促進, 評価のあり方等について意見交換。

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

省エネルギーにかかる経費節約については、光熱水料で契約変更が可能なものについて昨年度に引き続き契約の見直しを行った。その結果、電気料について経費節減を行うことができた。また、紙の使用量については両面印刷を活用する等節約を進めてきたことにより、昨年度と比較して99.5%に抑えることができた。施設の有効利用について、積極的に広報した結果昨年と比較して対外貸付が18件増加した。

さらに、放送大学通信教育の教養科目の受講、接遇研修等を通して、職員の資質の向上を図り、意識や取り組みの改善に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

ガス使用量が減った原因は熱源機器設備故障により、機器の稼働停止したためである。また、水道量増加の原因の大半はクーリングタワーの不調によるものであり、共に早急に対処すべき課題となっている。

【計画を達成するために障害となっている点】

光熱水料は、入場者数や今年の猛暑等季節の寒暖に影響を受けるため、年間使用量の把握が困難である。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画	
(1)-1	体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。
(1)-2	収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

実績

1. 購入	49点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)
2. 寄贈	59点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)
3. 寄託	351点(うち国宝 0点, 重要文化財 0点)
4. 陳列品購入費	予算額 212,574,000円 決算額 243,747,250円

自己点検評価

<p>【良かった点, 特色ある取組み】</p> <p>本館：開館以来継続的な収集に努めてきた結果、当館のコレクションは比較的欠落の少ない、近代日本美術を通観し得るものとなっているが、個々の部分については一層の充実が望まれる部分も多い。</p> <p>その中で、平成16年度においては、村上華岳の国画創作協会への最後の出品作として名高い《松山雲煙》(1925)、大正期新興美術運動の代表的作家である柳瀬正夢の大作《門司港》(1919)、高村光太郎の初期の希少かつ高質な丸彫り《兎》(1899頃)、中村岳陵の戦前の日本画における先進的作例《豊幡雲》(1936)を購入できたことは大きな成果であった。これらの購入は、いずれも研究員が長年にわたって地道な調査を重ね、さらに、所蔵者との良好な関係を維持しつつ当館への信頼を得たことで可能となった。《松山雲煙》《門司港》は寄託作品として受け入れつつ長期間交渉を行った成果である。</p> <p>また、海外作家の代表的作例を収集するという観点から、今日、世界の彫刻界をリードする存在であるトニー・クラッグの大作《The Meter》(2003)、および、ビデオを用いた美術表現の先駆者であるビル・ヴィオラの《追憶の五重奏》(2003)を購入した。とりわけ後者は、多様化する同時代美術の新しい表現形式を的確に把握した美術作品の収蔵として、意義深いものであるが、平成15年度に当館で開催された企画展「旅」展へのこの作家の出品以来、最良の収蔵作品を得るべく長く交流を続けてきた成果である。</p> <p>また、野見山暁治、堂本右美、加納光於、遠藤利克ら中堅からベテランの作家の主要作品を購入、さらには「モノ派」の代表的作家である菅木志雄に当館の建築スペースに応じた作品の制作を依頼し購入するなど、同時代の美術振興に取り組んだ。</p> <p>写真作品については、川田喜久治の代表作《「地図」より》(1960-65)のプラチナプリントによるニュープリントをはじめ、着実に収集を行った。</p> <p>受贈の成果としては、加山又造の代表作のひとつ《千羽鶴》(1970)をはじめ、野見山暁治、杉本健吉、松本晃の各作家、ないしご遺族からの寄贈があった。また寄託については、国吉康雄展終了後、展示品であった国吉作品22点の受け入れ、平成17年度個展を開催予定の藤田嗣治作品13点の受け入れが特筆される。寄贈・寄託による作品は今年度常設展特集展示で有効に活用された。(佐伯祐三、長谷川利行、加山又造、若林奮)</p>
--

また、昨年度の評価委員会の指摘を踏まえ、作品の国際的な市場動向をより綿密に調査すべく研究員が2回にわたって海外調査を行った。

工芸館：平成16年度は、近代陶芸を代表する北大路魯山人による、既収蔵の色絵作品ではなく日本の古典復興を担った織部作品《織部蓋物》(1950-59)をはじめ、イギリスの陶芸を名実ともに代表したハンス・コパーの《キクラデス・フォーム》(1972)やルーシー・リーの《白釉青象嵌鉢》(1979)等、多様な作品を収蔵した。

企画展の関連として、四谷シモンの《解剖学の少年》(1983)やハンス・ベルメールの《ポートフォリオ「人形」》(1935-75)等の人形作品、織の築城則子の帯作品《小倉縞木綿帯 分水嶺》(2004)、また、現代工芸を代表して先鋭な活動を展開している鍛金の橋本真之の大型作品《運動膜・切片群》(2004)を購入して、収蔵作品のいっそうの充実を図った。

受贈については、ガラス作家藤田喬平の遺族から、《飾篁 竹取物語》(1994)他全13点のまとまった寄贈があり、日本の現代ガラス界を代表し、国際的にも高い評価のある藤田の系統だった展示が可能となった。

また、長年前衛陶芸をリードし、当館で回顧展開催後に物故となった鈴木治の初期のオブジェ作品《器》(1965)がアメリカの収集家から寄贈された。

【見直し又は改善を要する点】又は【計画を達成するために障害となっている点】

本館：美術作品の収集については、作品が市場に出ることが必要となるため、当館が希望する作品を随意に入手できないという問題がある。そのため、常日頃から、主要作品の所在状況の把握に努めているが、今後なお一層のリサーチが望まれる。

また、海外の主要作家の作品は今日急激に高騰しており、数年前に比べ、著しく購入が難しくなっている。これらについては、今後、寄託、寄贈などの形での収蔵も模索していかねばならない。

現代美術の分野においては、新しい諸動向を常に把握し続け、収蔵につなげる努力をするとともに、いたずらに流行に追随するのではなく、確固とした収蔵方針のもとに長期的な視点をも併せ持ちながら収集活動を展開していきたい。また、展示会場以外のパブリックスペースへの作品設置も検討していきたい。

工芸館：戦後の様々な傾向の作品はある程度収集することができたが、近代の始まりである明治期、また新しい傾向の工芸が生まれてくる大正中頃から昭和初期の作品、戦後の新しい傾向を示す作品などがまだまだ不十分である。しかしながら、近代の重要な作品は各美術館・博物館や相応の個人蔵となっており、また、作品が市場にでる機会も少ない上に、高額でもあるため、収蔵の機会が得られにくいのが現状である。これらの作品については、寄託による保管・活用を推し進めるとともに、計画的な収集を図っていきたい。

日本の近代デザイン作品については、グラフィック・デザイン作品の収集については前進したが、工業デザインは未だ不十分であり、また、諸外国作品の収集は工芸、デザイン両部門ともに十分とは言えない。今後、これらの作品を系統的に収集するためにも、主要作家の作品を収集し、コレクションの核を形成することが課題であると考えられる。

戦後の工芸と工業デザインは、近年の研究および調査活動により、作品の確認と重要さの位置づけがなされつつあり、主要な作家などを計画的かつ積極的に収集を行っていきたい。

***添付資料**

収集した美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.1)

寄託された美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.2)

購入・寄贈美術作品一覧(事業実績統計表 p.17)

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) 本館

展示会場

空調実施時間 24時間

温度 25.0 湿度 55% (夏期)

温度 21.5 湿度 55% (冬期)

* 上記の数値は、入館者が入ったときの設定(目標)値である。

収蔵庫

空調実施時間 24時間

温度 20.0 湿度 55% (日本画等)

温度 20.0 湿度 55% (油彩画等)

(2) 工芸館

展示会場

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50~55%

収蔵庫

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50~55%

2. 照明

本館, 工芸館共

すべての蛍光灯は紫外線防止3,000K(博物館美術館用)

無段階調光可能

高演色タイプ

展示室 スポットライト(ハロゲン, 着脱式)

展示ケース 蛍光灯ライン照明(博物館美術館用)

3. 空気汚染

2か月に1回、建築物における衛生的環境の確保に関する法律に基づき空気環境測定を実施。

本館展示室では炭酸ガス排出のための排気ファンを24時間運転している。

フィルター等管理

- ・展示室 ロール・オ・マット, 高性能
- ・外気取り入れ口 ロール・オ・マット, 中性能, ケミカル
- ・収蔵庫 ロール・オ・マット, 高性能, 活性炭

4. 防災

(1) 本館

ア. 機械警備による監視, 及び中央監視室での監視。また, 火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員, 看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し, 警察, 消防へ直ちに通報される。

イ. 自動火災報知設備

煙感知器, 煙式スポット型(イオン化式, 光電式)

熱感知器 差動式分布型, 定温式・差動式スポット型

ガス探知機 窒素ガス・液化炭酸ガス消化設備用

ウ．消火設備

消火装置 窒素ガス・液化炭酸ガス消火設備（展示室，新収蔵庫）

ハロゲン化物消火設備（旧収蔵庫）

消火器具 ABC型粉末消火器具

消火栓

エ．東京国立近代美術館本館自衛消防訓練

平成16年10月21日（水）17：00～17：50

参加人数：約50名

（2）工芸館

ア．機械警備による監視，及び事務室の監視。また，火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員，看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し，警察，消防へ直ちに通報される。

イ．自動火災報知設備

煙感知器 煙式スポット型（イオン化式，光電式）

熱感知器 差動式分布型，定温式・差動式スポット型

ウ．消火設備

消火装置 ハロゲン化物消火設備（収蔵庫）

消火器具 ABC型粉末消火器具

消火栓

5．防犯

ア．警備 本館 有人警備（8：00～19：00，金曜日は21：00まで）

工芸館 有人警備（8：30～18：15）

本館，工芸館共に建物が無人となる時は機械警備を実施（24時間対応可能）

イ．展示室内 開館時間中は常時展示室内に看士を配置，警備員による随時巡回

ウ．展示ケース ガラスセンサーを設置，機械警備と連動（本館）

エ．館内各所に監視カメラを設置，警備員による監視。収蔵庫等は作業時を除き，常時機械警備を実施（本館）

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

平成16年度に相模原分館のある旧淵野辺キャンプ跡地の利用について，相模原市に対し，要望を提出中
本館：平成16年度の新収集作品を含めて，すべての所蔵作品の記録カードを作成している。また，24時間空調の実施によって，展覧会場，収蔵庫ともに適切な保存環境が整備されている。

工芸館：展覧会場，収蔵庫に対する空調等の保存環境は整備されているが，平成16年度は特に，作品荷解き室の空調設備の点検・改修を行った。また，所蔵作品の記録作成も順次進めているところである。

【見直し又は改善を要する点】

本館：改築後4年を経た収蔵庫および展示場について，空調設備の経年変化，空気環境の変化などを勘案しつつ，空調機の運用やフィルターの管理などを改めて精査し，安定した空気質の管理が出来る体制を目指したい。

又，熱源設備が経年劣化により冷温水が維持できず改修を要するが，当該経費は高額であるため予算要求を行い実施する計画である

工芸館：所蔵作品の点検および記録作成をさらに推し進めていきたい。当館の収蔵庫は直接に通路および点検・梱包等の作業の場所と接しており，また借用作品および梱包を収蔵庫内に保管している実状である。収蔵庫を含む工芸館の施設が手狭となっている理由によるものであるが，保管作品の保全上，収蔵庫全体の燻蒸の実施を検討したい。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理, 保存処理を要する収蔵品等については, 保存科学の専門家等との連携の下, 修理, 保存処理計画をたて, 各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち, 緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理, 保存処理の充実に寄与する。

実績

1. 修理件数

日本画	9件
洋画	14件
水彩・素描	19件
版画	21件
彫刻	1件
陶磁	0件
漆工・木工・竹工	9件
染織	0件
金工	0件

2. 修理経費 予算額 15,012,000円 決算額 15,518,575円

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

本館: 毎年, 修理を要する作品の洗い出しと実施を続けてきた結果, 現在では, 緊急の修理を要する作品はほとんど無いと言ってよい状況にある。しかし, 明治・大正期の作品に関しては, 大なり小なり作品の状態に問題があるものも多く, 収蔵庫内での保管には支障が無いが, ギャラリーでの展示には多少問題のある作品や, 館内での展示には支障が無いが, 貸出(輸送)については危惧がある作品が多い。この点については, 常設展や貸出の準備段階における作品の状態チェックが, 所蔵作品の診断の機会となっており, 平成16年度は, そうした展示・貸出目的のために早急な修復措置を必要とする作品の修理を行った(事業実績統計表参照)。

また, 修理業者への指導については, 抜本的な修理を行なうか, それとも部分的な修理を施して, その後の経過を継続的に観察していくかなど, 処置の方法については修理業者と綿密な話し合いを行った上で委託し, 修理報告書の提出を義務づけている。

新たに構築された4館共通の国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの中に, 内部データとして, 作品修復記録の概要を提供・掲載したことにより, 他館の所蔵作品の修復データを容易に参照できるようになった。

工芸館: 所蔵作品の現状については常に点検し把握するよう努めており, 緊急な対処を必要とする作品はない。ただ, 通常の展示や貸し出し作業に伴う汚れや軽微な擦過傷が生じる等の問題が生じている。また, 工芸品特有の経年変化による漆工や木工作品, 染織作品, 金工作品等に品質の劣化や痩せ(木材の合わせた部分が温湿度の変化でわずかにずれる)がみられ, 染織作品では糊の黄ばみ(制作時に糊が十分に落ちていず染みになる)やシミが発生しているものがある。こうした作品は, これまで計画的に修理を進めてきた。平成16年度は漆工作品9点の修復を行った。作品は田所芳哉の漆塗り作品3点と, 音丸耕堂の彫漆作品6点で, いずれも文化庁から管理換えされる以前の長年月の使用や, 工芸館での展示および貸与申請を多く受ける作品である。汚れや擦過傷, 打傷の修復, 漆の擦り養生等を, 制作の特質を損なうことなく, 高い技術を要するそれらの保存の修復を行えたことは有意義であった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：全体として深刻な問題は少ないが、全ての作品について経年変化による劣化、汚れは見受けられる。今後も最適な保存環境を維持すると同時に、経年変化に対する細やかな手入れと状況に応じた対策を講じていきたい。なお、保存修復については、今後より一層さまざまな外部の専門家や研究所、修復家との緊密な協力が必要とされる。既存の体制にとらわれずに連携体制を探っていきたい。

工芸館：工芸作品は、温湿度や紫外線、また展示中に付着する埃や汚れ等の影響を受けやすい。そのような性質に留意した上で、当館内外で活用される機会が増大しつつある公衆の観覧や研究活動等に使用するために、よりの確な作品の状態チェックを継続して行い、作品管理システムにも反映させていくことが有効であると考えている。

近年に多く行ってきた漆工作品では、重要な作品で慎重かつ高い修復技術、時間を要するいくらかの作品はいまだ残されているが、特に活用の度合いが高いものは終えることができた。同様に、特に文化庁管理換えて収蔵された作品等のうちで染料の弱い作品や公開・活用の機会の多いものなど、染織作品で積年の汚れや染み、黴等の問題が発生している。相当の予算支出と技術が必要なことであり、次年度以降はこれらを計画的に、優先度の高いものから修復を行っていきたい。

***添付資料**

修理した美術作品の点数（事業実績統計表 p.3）

修理した美術作品一覧（事業実績統計表 p.38）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

- (1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
- (1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。
- (1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

本館 年3～5回程度

工芸館 年2～3回程度

- (1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。
- (1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。
- (1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。
なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。
また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。
- (2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。
- (3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 常設展

(1) 本館 展示替 5回

(屏風及び軸装の日本画等については、原則的に各会期間に展示替えを行った。)

(2) 工芸館 展示替 4回

2. 特別展・共催展 10回

(1) 本館(中期計画記載回数:年3～5回)

「国吉康雄」展

「ブラジル:ポディ・ノスタルジア」展

「琳派 RIMPA」

「木村伊兵衛」展

「草間彌生」展

「痕跡 戦後美術における身体と思考」

「ゴッホ 孤高の画家の原風景」

* 「国吉康雄」展の会期は平成16年3月23日から

* 「ゴッホ 孤高の画家の原風景」の会期は平成17年5月22日まで

(2) 工芸館(中期計画記載回数:年2～3回)

「非情のオブジェ 現代工芸の11人」

「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」 「近代日本の陶芸」

「河野鷹思のグラフィック・デザイン」

3. 入館者数 621,266人(目標入館者数 517,000人)

(1) 本館

常設展 195,831人 (目標入館者数 168,000人)
(前年度入館者数 152,415人 対前年度比 128.49%)
企画展 324,471人 (目標入館者数 290,000人)
(前年度入館者数 148,542人 対前年度比 218.44%)

(2) 工芸館

常設展 58,075人 (目標入館者数 29,000人)
(前年度入館者数 35,026人 対前年度比 165.81%)
企画展 42,889人 (目標入館者数 30,000人)
(前年度入館者数 79,108人 対前年度比 54.22%)

目標入館者数の設定にあたっては、基本的に当館で行われた同種の展覧会の入館者数のほか、他館での展覧会データもあればそれも参考にしている。その上で、歴史的な評価の変動や世代による価値観の多様化といった時間の経過からくる変化、同種展覧会の開催頻度、知名度、単独主催か共催かといった運営形態、展覧会にかかった労力や経費、開催の時期(シーズン)といった問題を加味して、最終的な目標入館者数を試算している。

4. 海外交流展 0回

5. 地方巡回展 0回(平成12年度実績:0回 0人)

6. 国立美術館巡回展 0回 *京都国立近代美術館で実施(平成12年度実施:0回 0人)

7. 展覧会開催経費 予算額 326,985,000円 決算額 318,983,323円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：平成16年度は、特に常設展の見直しに努めた。具体的には、近代日本美術の流れを、その代表作によって通覧していただく当館の特色をより生かすために、編年的展示の随所に、会期ごとに特集展示を織り交ぜ、展示にメリハリをつけることを試みた。

また、展示セクションと導線の明確化、平易で持ち運び可能な館内解説『鑑賞ノススメ』の設置などの新たな試みを行った(「常設展」の自己点検評価を参照)。これらの試みが、観覧者増加の一因となったと考えられる。

企画展・共催展に関しては、江戸期から現代までを視野に収めた「琳派 RIMPA」展や、これまで取り上げる機会の少なかった地域を対象とした「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展からゴッホ展に至るまで、非常に多彩な年間プログラムを組むことができた。また「琳派 RIMPA」展に際しては国際シンポジウムを、「ブラジル」展に際しては12回にのぼる講演会等を開催するなど、関連事業においても新規の取り組みが多く、新聞・雑誌等の反響(「展覧会関連新聞・雑誌記事等」参照)を見ても、所期の成果を収めたと考える。

工芸館：各展覧会の特長を生かした教育普及活動に努めた。具体的には、従来の広報誌等とのタイアップに加え、産業見本市・展示会、工芸・デザイン関係大公募展会場における広報活動、小・中学生対象の新聞等への記事掲載の積極的な働きかけを行った。

また、所蔵作品展「動物のモチーフ」では、ワークシート、ワークショップ、動物似顔絵大会など、多彩なプログラムを行った。このことは、小・中学生入館者数の増加の大きな要因になった。

展示室に「人間国宝・巨匠コーナー」を設け、企画展開催中であっても、工芸館所蔵の名品を常時展示することができるようにした。

平成16年6月より、ボランティアのガイドスタッフによる「タッチ&トーク」を開始し、同時に、出品作品と同等の参考作品に触りながら鑑賞するコーナーを開設し、それとメディアの取材・掲載を連動させ、全体として広報活動の活発化につなげた。

すべての展示作品名称の振り仮名を入れたリストを発行した。

【見直し又は改善を要する点】

本館：常設展示は3フロアに渡り、展示点数も多いため、来館者への順路の明示のあり方とその方法は引き続き大きな検討課題である。全ての作品を決まった順序で見てもらおうという発想だけではなく、多様な来館者のさまざまなニーズにこたえられるような総合的なサイン計画が必要である。広報については、経費上の制約も大きいですが、今後、より重点的な試みが必要と考える。

工芸館：目標入館者数は達成したが、前年度よりも入館者数が減少しているのは、共催展がなかったことが大きな要因である。大きな広報力を持つメディアとの共催は、展覧会の周知、入館者数確保には有効なものであり、それはひいては工芸館の認知度を上げることにもつながる。建物等の規模から、あまり多くの入館者、収益を期待できない工芸館での共催展実現は容易ではないが、展覧会テーマの様々な角度からの検討とともに、実現に向けて努力していきたい。

*添付資料

入館者数の推移（事業実績統計表 p.4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p.7）

本館

「常設展」

方 針

近代日本美術の歴史的展開を系統的に分かりやすく展覧していただくことを目指した。

このため、平成16年度は各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちつつ、会期ごとに展示作品のかなりの部分（日本画・版画・写真はすべて）を入れ替えながら、各作家および時代の多面的な相貌を幅広く鑑賞できるようにすること、会期ごとにテーマを立てた小特集を行い、新たな角度から作品に光を当てる試みを行うこと、また、セクション表示、館内解説などの改善に努め、より見やすい展示を心がけることに努めることとした。

実 績

1. 開館期間等

所蔵作品展「近代日本の美術」

平成16年3月5日（金）～5月16日（日）（65日間/うち平成16年度41日間）

特集展示（4階）：戸張孤雁

版画コーナー（3階）：恩地孝四郎

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：彫刻家の眼と手 - 素描/彫刻

出品点数：269点（うち重要文化財3点）

平成16年5月22日（土）～8月12日（木）（71日間）

特集展示（4階）：佐伯祐三

版画コーナー（3階）：大正期の版画 - 創作版画と新版画

写真コーナー（3階）：セバスチャン・サルガド

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：加山又造

出品点数：248点（うち重要文化財2点）

平成16年8月21日（土）～10月3日（日）（43日間）

特集展示（4階）：巖光

版画コーナー（3階）：長谷川潔

写真コーナー（3階）：東松照明

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：若林奮

出品点数：344点（うち重要文化財4点）

平成16年10月9日（土）～12月19日（日）（62日間）

版画コーナー（3階）：明治から昭和にかけての水彩画

出品点数：191点（うち重要文化財4点）

平成16年12月25日（土）～平成17年2月27日（日）（53日間）

特集展示（4階）：母子像

版画コーナー（3階）：「新版画」の世界 - 伝統的木版画的再生

写真コーナー（3階）：ニュー・ヴィジョン - 大戦間期の近代的写真表現

出品点数：208点（うち重要文化財5点）

平成17年3月5日（土）～5月22日（日）（75日間/うち平成16年度24日間）

特集展示（4階）：描かれた景観 - 移りゆく東京

版画コーナー（3階）：二つの版画集 ココシユカとコリント

写真コーナー（3階）：椎原治

所蔵作品展（2階ギャラリー4）：戦後日本画の新風 横山操と中村正義

出品点数：265点（うち重要文化財3点）

平成16年度 計294日間開催（所蔵作品展のみの開催期間70日間）

2. 会場 東京国立近代美術館本館2階～4階

3. 入館者数 195,831人（常設展目標入館者数 168,000人）
うち常設展のみ入館者数58,966人

4. 入場料金 一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
一般(団体)210円 大学生(団体)70円 高校生(団体)40円

5. 入場料収入 常設展のみの入場料収入 9,782,590円
（目標入場料収入 6,717,000円）

6. アンケート調査

【常設展】

第1回 調査期間 平成16年8月5日～平成16年8月8日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件（母集団21,197人）有効回答数297件

アンケート結果

・良い88.3%（262件）・普通10.1%（30件）・悪い1.6%（5件）

第2回 調査期間 平成17年3月17日～平成17年3月21日（5日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 299件（母集団21,051人）有効回答数292件

アンケート結果

・良い80.1%（234件）・普通18.2%（53件）・悪い1.7%（5件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

順路を見やすくするため、会場内サイン計画の見直しを行い、新たなサイン掲示を設置した。具体的には、各フロアのエレベータ前に会場構成を記した地図を掲示し、コーナーごとにバナーを吊るし、解説パネルも一新し、よりわかりやすい会場構成とした。また、これらの掲示とデザインをあわせて、来館者に配布する会場案内も一新した。

1階で開催の企画展を目的に来館した観客に、常設展もあわせて観覧してもらうためのアピールとして、エントランスホールに液晶ディスプレイで常設展展示中の代表的作品を放映した。

前年度の指摘を踏まえて、章ごとの解説パネルを和英併記とした。

常設展の広報について、平成16年度はギャラリー4での加山又造、若林奮の個展形式の特集展示にあわせてチラシを作成し、各方面に配布して広報に努めた。

また、平成16年12月31日付の朝日新聞紙上に、常設展の年始開館について広告を出し、新年2日からの開館について認知度アップに努めた。実際、新年2日、3日の入館者数は、年始開館を開始した前年度に比べて大幅な増加が見られた（1月2日入館者数：平成16年度986人/平成15年度291人）。

平成16年1月から読売新聞都民版で一ヶ月に1回「近代美術の東京」を連載開始し、展示中の作品をわかりやすく紹介するとともに広報活動の一環とした。

前年度に引き続き、ホームページに展示作品のリストや、展示の見どころを紹介する文章を掲載し、コレクション展示の豊富さと年間を通じた変化をアピールした。

全フロアに主要作品の解説シート『鑑賞ノススメ』を設置し、来館者の鑑賞の一助とした。

光村推古書院と共同で『東京国立近代美術館所蔵名品選 20世紀の絵画』を一般書籍として出版し、当館コレクションの魅力を広くアピールした。

【見直し又は改善を要する点】

常設展は、企画展と比べて広報手段が限られており、より計画的な広報戦略が必要である。平成16年度はチラシ、新聞広告という手法を試みたが、一層効果的な広報のあり方について検討し、新聞・雑誌などのマスメディアを用いた広報に積極的に取り組みたい。

ホームページにおける常設展の紹介に関しては、よりわかりやすくアピール度の高いものにするよう、画像の使用を増やし、見所を明確に示すなど、工夫改善を重ねていく必要がある。また、メールマガジンも工夫を重ね、展示替えの情報をより魅力的に伝えられるよう努めたい。

平成16年度、展示ギャラリーのサイン計画を見直して改善を行ったが、次年度には特集コーナー、版画、写真コーナーなどについて、入り口に新たにデザインしたタイトルパネルを設けるなど、よりわかりやすくなるよう、引き続き検討したい。

「難解」と言われがちな2階の現代美術の展示について、作者を招いてトークを依頼するなど、より前向きな取り組みが望まれる。

リニューアルから3年を経過し、展示壁の一部や展示台などに傷みが見られるため、早期に補修し美しい展示空間の維持に努める必要がある。

「国吉康雄」展（共催展）

方 針

本展は、17歳でアメリカにわたり、やがてアメリカを代表する画家となった国吉康雄の芸術を、没後50年を期に再検証しようとする試みであった。国吉が生きたのは日本人移民排斥、大恐慌、そして第二次世界大戦と、日本とアメリカが大きく揺れ動いた時代である。その中で二つの国のどちらにも根を保つことができなかった国吉が絵画のなかに求めたものを、そのときどきの社会の動きも踏まえながらたどれるよう構成した。

実 績

1. 開会期間 平成16年3月23日～平成16年5月16日
(50日間/うち平成16年度中41日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 131件(うち国宝 0件, 重要文化財 0件)
4. 主 催 東京国立近代美術館, NHK, NHKプロモーション
後 援 外務省, 文化庁, アメリカ大使館
協 力 日本航空
5. 入館者数 37,291人(一日平均746人)(目標 52,000人)
うち平成16年度中 33,450人(目標 43,000人)
6. 入場料金 個人:一般 1,300円 大学生 900円 高校生 500円
団体:一般 900円 大学生 600円 高校生 250円
前売:一般 1,000円 大学生 700円 高校生 300円
割引:一般 1,100円 大学生 800円 高校生 400円
7. 入場料収入 8,752,030円(目標入場料収入 5,450,000円)
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
国吉の作品はどれも社会のスポットライトをあびるものではなく、小さいもの、寄る辺ないもの、弱いものを描いている。それは国吉が、これらのなかにこそ、国や文化の違いをこえて、すべての人間の中に等しくある、無垢で力強い姿を見出していたからである。展覧会の全体は国吉が絵画を通じて託したメッセージを理解しやすいよう、1920年代の初期の作品をとりあげる「 .いのちの海」、1930-40年代を扱う「 .社会の荒波」、そして晩年1940-50年代の作品を紹介する「 .いのちの島の建設」の3章とし、油彩、写真あわせて131点で構成したほか、会場に国吉の言葉を掲げ、作品解説も丁寧に付すなど、展示にも工夫した。
10. 講演会等 実施回数計 2回(年度計画記載回数:講演会2回)
参加人数計 174人

11. 広報

共催者のNHKの協力を得て、プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（京王線、小田急線、東急線、JR、営団地下鉄）へのポスターの提出、ホームページ上での展覧会紹介、また都内近郊のコミュニティー・センター等で数回にわたり展覧会を紹介をする講演会を開催、「新日曜美術館」でテレビ放映したほか、雑誌・新聞の取材にも対応した。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

The East, February 2004 "Kuniyoshi Yasuo" (Kobayashi Motoki)

産経新聞 2004年3月27日「国吉康雄 米国に夢を見つめた少年」(生田誠)

日本経済新聞 2004年3月30日<春秋>

てんとう虫 2004年3月号<石坂浩二の悠々美的>「国吉康雄展」(石坂浩二)

朝日新聞 2004年4月8日<アートブリズム>「迷走するアメリカ民主主義」(山口泰二) / 「故国の喪失感が表す今日性」(田中三蔵)

The Daily Yomiuri, April 8, 2004 "Artist's lifelong adjustment to an ever-changing world" (Asami Nagai)

東京新聞 2004年4月10日「揺れ動く魂の軌跡を示す晩年の作」(中村隆夫)

新美術新聞 2004年4月11日「国吉康雄を見て」(掛井五郎)

公明新聞 2004年4月13日<美術>「アメリカと対峙する日本」(藤田一人)

しんぶん赤旗 2004年4月20日「アメリカに生きた画家の『いのち』の表現」(田中淳)

読売新聞 2004年5月13日「意外に謎めいた絵画空間」(前田恭二)

クロワッサン 2004年5月号<展覧会へようこそ>「国吉康雄展」(石坂浩二)

家庭画報 2004年5月号「『夢の国』で生をまっとうした国吉康雄のまなざし」

美術手帖 2004年6月号「国吉康雄 アメリカ『あるいは/そして』日本」(高島直之)

サライ 2004年11月号「東洋と西洋を生きた画家」

13. アンケート調査

調査期間 平成16年4月15日～平成16年4月18日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件(母集団37,291人)

16年度33,450人 有効回答数294人

アンケート結果 ・良い94.2%(277件)・普通5.8%(17件)・悪い0.0%(0件)

13-1. アンケート調査(講演会)

調査期間 平成16年4月10日・平成16年4月24日(2日間)

調査方法 講演会入場時に手渡し、終了後回収

アンケート回収数 106件(母集団37,291人)

16年度33,450人 有効回答数97人

アンケート結果 ・良い82.5%(80件)・普通16.5%(16件)・悪い1.0%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は愛知県美術館、富山県立近代美術館と、作品リストの作成、出品交渉、作品の借用、返却作業、会場パネル等の作成、カタログのテキストや章解説などについて、メールやファックス等で不断の打ち合わせを行いながら、密接に連携して実施した。

また、国吉研究者として知られる小澤善雄、律子夫妻の協力を得た。このことにより、カタログ中の年譜、文

献が非常に充実したものとなった。

アンケート等から見られる来館者の評判，マスコミ等の評論を通じて，この展覧会がこれまでにない新しい国吉像を提示したのものとして高い評価を得たことは，何よりの成果であった。

【見直し又は改善を要する点】

来館者からの高い評判，NHKの広範な広報活動にもかかわらず，入館者数が目標を大幅に下回ったことは残念であった。その原因は，予想以上に日本国内での国吉の知名度が低かったことによる。日本の近代美術史の中では，国吉はアメリカで成功した日本人画家として知られているが，一般的には知名度が低く，広報活動も広く浸透しなかったものと考えている。

他には，いわゆる個展が開かれる機会が多くなかったこと，また画集等もほとんど刊行されることがなかったことが理由と考えられるが，国吉の日本国内での一般性の低さに対する認識不足が，展覧会広報の方向性を狂わせてしまったように思われる。今後は正確な情報収集に努め，展覧会の内容と意図がうまく伝わるような広報活動の方法を工夫していきたい。

「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展（企画展）

方 針

本展は、日本ではあまり知られていないブラジルの現代美術を、同国の近代美術の歴史も踏まえながら紹介しようとしたものである。90年代以降世界のアートシーンで目覚ましい活躍をみせた現代作家に焦点を当てつつ、そこにブラジルの近代美術史上重要な仕事を残した物故作家も交えることで、この国の美術が欧米のモダニズムの成果をどのように咀嚼し、ブラジル固有の社会・文化状況に接合しながら新しい表現を模索していったか、というダイナミックな交渉の歴史を明らかにするとともに、時代を超えて引き継がれるその豊かな創造性の源泉を探った。

実 績

1．開会期間 平成16年6月8日～平成16年7月25日（42日間）

2．会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー

3．出品点数 41件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）

4．主 催 東京国立近代美術館，京都国立近代美術館，BRAZIL CONNECTS
共 催 国際交流基金
後 援 ブラジル大使館
特別協賛 HAWAIIANAS
協 賛 トヨタ，松下電器産業株式会社
協 力 VARIG BRAZIL

5．入館者数 11,922人（一日平均284人）（目標 11,000人）

6．入場料金 個人：一般 650円 大学生350円 高校生200円
団体：一般 450円 大学生200円 高校生100円
前売：一般 550円 大学生250円 高校生150円
割引：一般 600円 大学生300円 高校生150円

7．入場料収入 4,154,800円（目標入場料収入 2,225,000円）

8．担当した研究員数 3人（含む，国立新美術館 本橋研究員）

9．展覧会の内容

この展覧会では、とりわけブラジル美術に顕著な「身体」というテーマへの様々な取り組みを、3人の物故作家と6人の現代作家を織り交ぜて考察した。展覧会は前半と後半の2部に分けられ、前半ではブラジルの現実や歴史が直截的に刻み込まれたエネルギッシュな身体表現を、後半では、一転して鑑賞者の身体と美術作品との関係を探求するような観客参加型の作品を展示した。その結果、「身体」を媒介にすることで成立する、社会に対する批評精神と世界に対しての開放性に、ブラジル美術の特質が存在することを明らかにするとともに、すでに多方面で開拓された「身体」という問題に、いまなお新鮮な表現を生み出す可能性が秘められていることを提示した。

10．講演会等 実施回数計 12回（年度計画記載回数：講演会10回，ギャラリートーク4回）
参加人数計 1,354人

11. 広報

通常行われる、プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、東京メトロ）へのポスターの提出、チラシ配布に加え、東京メトロとのタイアップポスター（会期にあわせて駅構内においてブラジル音楽イベント開催）の制作・掲示やカフェ、レストラン、ファッション店舗をターゲットにしたポストカードの制作・配布など、ブラジル展ならではの広報活動を積極的に展開した。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

Musée 第49号（2004年5月）「ブラジル現代美術展 未知なる<南>の大国を体験せよ」
（東琢磨）

クロワッサン 639号（2004年6月25日）「ブラジル：ボディ・ノスタルジア展」
（南佳孝）

Lucia第6号（2004年7月1日）「太陽とボサノバの国から現代アートがやってきた」
（松下幸子）

毎日新聞 2004年7月7日 「多彩なブラジル美術の今：美術評論家・金澤毅さんと見る」（木村知勇）

朝日新聞 2004年7月15日 「ブラジル：ボディ・ノスタルジア展」（大西若人）

美術手帖 第853号（2004年8月号）「ブラジル：ボディ・ノスタルジア 輻輳する『身体』の想像力」
（林道郎）

13. アンケート調査

調査期間 平成16年7月8日～平成16年7月11日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件（母集団11,922人）有効回答数297人

アンケート結果

・良い80.2%（238件）・普通18.5%（55件）・悪い1.3%（4件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

特色ある取組みとして、約2年間の準備期間の中で、ブラジルにおいて、十分なアーティストの調査、および、美術館キュレーター、美術評論家、ギャラリーとのネットワークづくりが出来たことは、展覧会の開催とは別に大きな成果であった。

あえてブラジル側にキュレーターを立てずに、日本側の視点で、白紙の状態から調査をつみあげて展覧会を構成したことで、かえって独自の観点が提示できたのではないかと考えている。

それは、新聞・雑誌の批評で高い評価を得ていることや、テレビ、ラジオなどに数多く紹介されたこと、そして来館者アンケートなどからも明らかである。

また、この展覧会では、アートを入口にしてブラジルという国の魅力を知ってもらうことを目的に、人類学、音楽、映画、舞踊、建築などさまざまなジャンルの全10回に及ぶ連続講演会を企画するとともに、ブラジル音楽のコンサートと詩人によるパフォーマンスも開催した。この試みは、毎回多くの観客を集め、展覧会の話題づくりと集客に寄与した。

広報に関しては、ブラジルに興味をもっている若い世代を対象に、ポストカードを制作し、都内のカフェやファッションショップなどに大量に配布した。このような従来の展覧会とは異なる広報活動を展開できたことは、今後の活動のためにも収穫であった。

また、展覧会の準備の早い段階から、ブラジル大使館と共同してインターネットの情報サイトや、東京メトロに対して、展覧会広報につながるタイアップ企画の可能性を打診したことで、情報サイトにおけるブラジル特集や、東京メトロの駅構内のコンサートイベントに展覧会の宣伝を加えるなど、費用をかけず影響力のある広報が実現できた。

【見直し又は改善を要する点】

予想入館者数は達成したものの、ブラジルの美術を本格的に紹介するこの展覧会の希少性を考えると、もっと多くの観客に見てもらいたかったという気持ちは残る。

アンケート等で多く指摘を受けたのが、ポスター、チラシのデザインに対して、「印象が薄い」、「展覧会のイメージを伝えていない」などの声である。本展のポスター、チラシのデザインについては、通常の展覧会以上に時間をかけて打ち合わせを行い、いくつもの試案の中からデザインを選定したが、十分な成果を得られなかったことは、デザイナーの選定と、担当者の説明に不十分な部分があったと言える。展覧会の顔とも言えるポスター、チラシのデザインの質の向上のためには、今後は新たなデザイナーの発掘と、当館側の経験の蓄積が課題だと考えている。

また、大学生にターゲットを絞り、美術大学、美術史、ラテンアメリカ研究、ポルトガル学科を有する大学などにチラシ・ポスターを配布したが、その効果については疑問が残る。学生の集客を期待するのであれば、担当教授に展覧会を学外授業の一環としてとりあげてもらうことを直接依頼するなど、一歩踏み込んだ広報活動が必要と思われる。

学校見学でギャラリートークを行った際の学生の反応が良かっただけに、担当者自らの言葉で説明をするギャラリートークの機会を設けるべきだったと考える。

10回にわたる連続講演会については、学術的な講演会よりもむしろトークイベント的なものの方が観客の反応が良かった。今回のような連続講演会は、集まってくる観客層を想定した上で、その内容を企画する必要があったと考える。

「琳派 RIMPA」展（共催展）

方 針

【企画展】

本展は、近代美術館において古美術である琳派の名品を展示する企画である。このことには、重要な意義がある。俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一と連なる近世琳派の系譜も、近代日本の文脈に照らして見ると、はじめから「歴史」としてあったのではなく、近代人の眼が発見してきたものである。明治30年代にまず光琳が見直され、大正期になって宗達の大らかな芸術を評価するようになったという事も意外に知られていない。本展は、琳派を近代日本人の美意識の反映としてとらえ直そうという狙いがある。もちろん、近代美術館の琳派展として、明治・大正・昭和戦前期に繰り返しおこった近代日本画の琳派ブームにもスポットを当て、また、今日まで連綿と息づく近代琳派の精華を再検証する。そして、本展の最大の特徴が、琳派の普遍性、世界性を問うRIMPA展の試みである。このような認識の基に、本展は、歴史やジャンルを超えて、クリムトなどの西洋絵画をはじめ、近代洋画、現代美術など20世紀に現れた様々な形態の作品を幅広く視野に入れながら、その中にいわゆる琳派的なものとは何かを探ることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成16年8月21日～平成16年10月3日（43日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 81件（うち国宝 1件、重要文化財 9件）
4. 主 催 東京国立近代美術館，東京新聞
後 援 文化庁，千代田区
協 力 日本航空，JR東日本
5. 入館者数 166,524人（一日平均3,873人）（目標 131,000人）
6. 入場料金 個人：一般1300円 大学生800円 高校生500円
団体：一般 950円 大学生500円 高校生200円
前売：一般1100円 大学生600円 高校生300円
割引：一般1200円 大学生700円 高校生400円
7. 入場料収入 44,018,180円（目標入場料収入 16,603,000円）
8. 担当した研究員数 4人
9. 展覧会の内容
第一章「光琳 近代が再発見した日本美」：尾形光琳の代表作を展示。近代が再発見した日本美としてその軽妙で煌びやかな装飾美を再確認する。
第二章「宗達・光悦 芸術における個性と統合」：俵屋宗達と本阿弥光悦の名作を集めた。大正時代の近代的な芸術観の浸透によって、彼らの芸術の特徴である自由な発想とのびやかさが注目された。
第三章「江戸から明治へ 抱一・其一を中心に」：光琳以降の琳派の諸相を酒井抱一からはじまる「江戸琳派」の系譜を中心に明治中期までたどる。

第四章「琳派の近代 菱田春草から加山又造まで」: 下村観山にはじまる近代作家たちが生み出した装飾的表現の総体を近代琳派と位置付けた。自己様式の確立の過程で「装飾」と向かい合うとき「琳派様式」が現れる。

第五章「RIMPAの世界 きらめき・型・反復」: これまでの固定概念としての琳派をいったん忘れ、海外の作例を含めて近現代のさまざまな芸術をひろく見渡しなが、改めてRIMPAの諸例をリストアップし、伝統的琳派と重ね合わせて展示した。40作家、81件で構成された。

10. 講演会等 実施回数計 2回(年度計画記載回数: 講演会2回, ギャラリートーク0回)
参加人数計 291人

11. 広報

共催者の東京新聞の協力で、外部に広報事務所を設け、プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表を開催した。各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅(JR, 営団地下鉄)へのポスターの提出、テレビ・ラジオCMの放送、車内吊広告・電飾看板の掲示、チラシ配布、その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼(東京国立近代美術館) 第547号(2004年8-9月)「琳派の生々流転」(小林忠)
現代の眼(東京国立近代美術館) 第547号(2004年8-9月)「パリのRIMPA ウィーンのRIMPA」(馬淵明子)
東京新聞 2004年8月28日 「琳派 RIMPA」展に寄せて」(辻惟雄)
東京新聞 2004年8月22日 「琳派」(古田亮)
東京新聞 2004年9月3日 「「琳派 RIMPA」展」(小林忠)
東京新聞 2004年9月4日 「「琳派 RIMPA」展」(山下裕二)
東京新聞 2004年9月5日 「「琳派 RIMPA」展」(草薙奈津子)
東京新聞 2004年9月6日 「「琳派 RIMPA」展」(森村泰昌)
東京新聞 2004年9月7日 「「琳派 RIMPA」展」(池内紀)
東京新聞 2004年9月23日 「「琳派 RIMPA」展を見て」(松永真)
東京新聞 2004年9月24日 「「琳派 RIMPA」展を見て」(奥谷博)
東京新聞 2004年9月25日 「「琳派 RIMPA」展を見て」(岡本敏子)
朝日新聞 2004年9月16日 「美術 「琳派 RIMPA」展」(辻惟雄)
新美術新聞 2004年9月1日 「琳派 RIMPA展」(古田亮)
美術手帖 第849号(2003年10月号)「琳派からRIMPAへ」(古田亮)
美術手帖 第849号(2003年10月号)「RIMPAを語る」(杉本博司)
美術手帖 第849号(2003年10月号)「RIMPAを語る」(山下裕二)
美術手帖 第849号(2003年10月号)「RIMPAを語る」(奥村博)
芸術新潮 2004年9月 「日本絵画史のリンパ腺」(北澤憲昭)
文化庁月報 2004年7月 「琳派 RIMPA」(古田亮)
Newsweek 2004年9月6日 「The Gold Rash」(Kay Itoi)
読売新聞(夕刊) 2004年9月8日 「問い直される「琳派」」(前田恭二)
The Japan Times 2004年9月8日 「Art's ancient Moderns, Rimpa's classic style is reinvented」(Tai Kawabata)
美術研究 「琳派展」展評(戸田禎祐)

13. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成16年9月9日~平成16年9月12日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し，記述式（午前・午後各1時間）
 金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 297件（母集団166，524人）有効回答数296人

アンケート結果
 ・良い89.9%（266件）・普通10.1%（30件）・悪い0.0%（0件）

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

17万人近くの入館者を迎えたことは素直に良かったと考えている。また，展覧会図録の販売も，通常10人に1人の割合が，本展では約6.5人に1人という驚異的な売り上げを記録した。各メディアからも「意欲的な展覧会」として取り上げられ，多くの反響があった。それは，本展覧会が特色ある試みであったことを裏付けるものでもある。古美術，近代美術，西洋美術，そして現代美術までを連続させて展示するこの試みは，今後の展覧会のあり方に一石を投じるものと思われる。

会場での工夫としては，キャプションを展示ケースのガラス面に貼るタイプをはじめて使用した。また，解説文はそれぞれ100字程度として内容も極力平易なものとした。これについては概ね好評であり，新しいタイプの解説として受け取られた。

本展開催にともなう国際的学術会議「琳派 RIMPA」は，当館主催としてははじめての試みであった。展覧会を補完する意味で琳派をテーマとしたさまざまな今日の問題を取り上げ，各専門分野からパネリストを招き，講演を行うとともにディスカッションを行った。専門家を対象にした学術会議であったにもかかわらず，開催前から問い合わせが多数あり関心の高さが窺われた。展覧会と関連するシムポジウムの開催は非常に実り豊かなものであった。

【見直し又は改善を要する点】

この展覧会は，はじめから多くの入館者を期待し，普段あまり美術館に足を向けない一般の観覧者を想定していた。それゆえ，解説の文体などに工夫を凝らしたのだが，逆に美術館馴れた客層からは，文体がぐだげ過ぎている，主観を押し付けているなどの意見が聞かれた。本展程度の入館者数に対応する手段としては，一般客を目安にわかり易い解説を心がけることは必須だが，そのために「物足りなさ」を感じる層が出来てしまうことがわかった。今後は，解説の内容を硬軟二種類用意するなどの工夫も検討していきたい。

また，展示室によっては，一度に予想以上の入館者があったために，お互いの鑑賞の妨げになってしまう箇所もあった。展示作品の配置にはより一層の注意が必要と思われる。

特集展示「木村伊兵衛」展（共催展）

方 針

木村伊兵衛(1901-1974)は1930年代初頭、新興写真の運動の中で頭角を現し、以降晩年にいたるまで常に一線で活躍した、日本近代写真史上もっとも重要な写真家の一人である。

本展は、報道写真という新分野にとりくみ、また肖像写真や舞台写真、街頭でのスナップ写真など、広範なテーマでそれぞれに優れた仕事を残した木村の業績を回顧するとともに、その活動を初期から終戦直後までと、50年代から晩年に至るまでの二つの時期に区分し、「報道写真」をキーワードに展開をたどることで、現代の写真表現につながる木村の仕事の意義の検証を試みることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成16年10月9日(土)～平成16年12月19日(日)(62日間)

2. 会 場 東京国立近代美術館本館 ギャラリー4, 所蔵品ギャラリー(4, 3階)

3. 出品点数 131件(うち国宝 0件, 重要文化財 0件)

4. 主 催 東京国立近代美術館, 朝日新聞社
協 力 特種製紙株式会社

5. 入館者数 27,238人(目標 26,000人)

6. 入場料金 個人:一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
団体:一般 210円 大学生 70円 高校生 40円

7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。

8. 担当した研究員数 3人

9. 展覧会の内容

本展は、木村伊兵衛の初期から終戦直後までの、主に印刷物を通じて社会へと流通した仕事を紹介する第一部と、戦後の円熟期の作品からそのカメラワークのエッセンスを抽出することを主眼とした第二部の二部構成とした。第一部では雑誌やポスターなど、木村の写真を用いた印刷物を多数展示、また会場を当館の所蔵品展示「近代日本の美術」のなかに時代順に数箇所に分けて組み込むことで、同時代との関連を呈示した。第二部では木村自身によってプリントされた貴重な印画を中心に代表作である「秋田」や「街角」などのシリーズを展示した。

10. 講演会等 実施回数 4回 (年度計画記載回数: 2回)

11. 広報

プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター、チラシの発送、鉄道駅(京王線, JR, 東京メトロ)へのポスター掲出、ホームページ上での展覧会紹介、その他雑誌・新聞等による取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼（東京国立近代美術館）第548号（2004年10-11月）「外国のグラフ雑誌に見る木村伊兵衛の報道写真」（白山真理）

朝日新聞 2004年10月6日「木村伊兵衛展 戦前戦後の名作シリーズで紹介」（無署名）

朝日新聞 2004年10月9日「木村伊兵衛展始まる」（無署名）

朝日新聞 2004年10月20日「木村伊兵衛展 小型カメラの達人の仕事」（無署名）

公明新聞（日曜版）2004年10月24日「今なぜ木村伊兵衛か」（金子隆一）

産経新聞 2004年11月2日「木村伊兵衛展 昭和のスピード表現」（生田誠）

Metropolis #555 November 12, 2004 “Thei Kimura: The Man with the Camera – A Japanese Photographic Maestro Turns His Lens on Man and Nature”（Jeff Michael Hammond）

The Daily Yomiuri, November 25, 2004 “Kimura’s camera captures postwar Japan”（Robert Reed）

アサヒカメラ 2004年12月号「木村伊兵衛と映画」（展示作品紹介）

高知新聞 2005年1月9日「美術随想 月のはじめに22 写真のとき」（鍵岡正謹）

13. アンケート調査

調査期間 平成16年12月9日～平成16年12月12日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件（母集団27,238人）有効回答数297人

アンケート結果

・良い84.5%（251件）・普通13.1%（39件）・悪い2.4%（7件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

特色ある取組みとして、本展は第一部において、作品・関連資料等を当館の所蔵品展示「近代日本の美術」のなかに数箇所に分けて組み込み、同時代の美術の文脈と対照させるかたちでの展示を試みた。実際に社会に流通した雑誌・ポスターなど多数の印刷物をまじえた展示作品を、同時代の日本近代美術の作品と同じ空間に置くことで、「報道写真」を掲げ、社会にひろく発信するメディアとしての写真の可能性を、パイオニアとして切り拓いていった木村の写真史上における功績を検証するためである。

また、戦前期の印刷物での仕事の展示はまとまったかたちでは初めての紹介となった。こうした試みは展評等でも好意的に評価されたほか、所蔵品展示における新たな工夫として、時代順の展示という枠組みの中で常に展示替えを行っている当館の所蔵品展の特色を浮き彫りにし、興味を喚起する役割を果たしたものと考えらる。

所蔵品ギャラリーに分散するという展示構成であったため、展示順に解説するツアー形式のギャラリートークを実施した。口頭での説明により展示意図や所蔵品展との連関への理解も得られ、参加者からは総じて好意的な感想が寄せられた。

【見直し又は改善を要する点】

展示が3フロアにまたがり、分散的に配置されていたため、会場ガイドを作成し、各展示場所にはバナーを掲示するなど、観覧者の誘導には留意したが、順路などに若干の混乱が生じた。

展覧会出品作の一部を所蔵品展示の中に組み込む今回の方式に対しては、「木村展だけを見に来た者にとっては作品が分散していて見にくい」、「木村作品の世界に浸れなかった」など、一部の観覧者には否定的な反応・評価があったことがアンケートの回答等からうかがわれた。こうした前例のない形式を試みる際には、展示意図の説明や、順路案内などをより丁寧に行うことが必要であり、今後の教訓として生かしたい。

「草間彌生 - 永遠の現在」展（企画展）

方 針

【企画展】

本展は、戦後の早い時期（1957年）に渡米して以来、欧米の美術界で高い評価を受け、1974年に帰国後も国際的な活躍を続ける草間彌生を単独で取り上げた、国立美術館では初めての個展である。出品作品は、作者10歳時のスケッチから最近作までを網羅するものとなったが、それらを回顧的にではなく、草間の現在の仕事との関わりの中で見晴らすために、展示においては時系列よりも空間性を重視した編成を目指した。また同展は、東京・京都の両国立近代美術館および広島市現代美術館・熊本市現代美術館・松本市美術館との共同研究・調査のもとに組織されたが、展示（会場構成）においては各館の特色あるコンセプトを生かしつつ、カタログに関してはそれらを総合的に盛り込んだ内容となるような編集を目指した。

実 績

1. 開会期間 平成16年10月26日～平成16年12月19日（48日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 110件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 主 催 東京国立近代美術館，京都国立近代美術館
5. 入館者数 31,961人（一日平均666人）（目標 25,000人）
6. 入場料金 個人：一般850円 大学生450円 高校生250円
団体：一般600円 大学生250円 高校生100円
前売：一般700円 大学生350円 高校生150円
割引：一般800円 大学生400円 高校生200円
7. 入場料収入 17,195,500円（目標入場料収入 6,606,000円）
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
絵画，彫刻，パフォーマンス，ビデオ・インスタレーションなどきわめて多方面にわたる草間の活動を，現在の視点から総合的に見直すために作品を厳選し，全体を，空間的に完結したギャラリーの集合体となるように構成した。出品作品110点の内訳は，絵画33点，水彩・素描24点，コラージュ15点，彫刻29点，DVD映像作品3点，インスタレーション6点である。
10. 講演会等 実施回数計 5回（年度計画記載回数：講演会3回，ギャラリートーク2回）
参加人数計 288人（講演会のみ的人数）
11. 広報
通常行われる，プレスリリースの作成・発送，記者内見会および記者発表（草間彌生氏出席）の開催，各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送，鉄道駅（JR，東京メトロ）へのポスターの提出，チラシ配布に

加え、作家側の広報担当者と連携して、主要新聞文化欄や美術雑誌編集部等を中心に、主催者側からの働きかけを積極的に行った。また個別的な試みとして、りそな銀行のカードのポスターに草間彌生の作品写真が用いられたのを機会に、ポスターの相互的な掲示を行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼 2004年10 11月号 (No.548) 「草間彌生私記」(谷川渥), 「永遠の少年少女を生きる」(木幡和枝)
週刊文春 2004年10月7日号 「草間彌生 永遠の現在」(無署名)
読売新聞 2004年10月14日(夕刊) 「川端邸に草間さん初期作」(前田恭二)
読売新聞 2004年10月25日(夕刊) 「草間彌生さん 川端康成氏との出会い」(前田恭二)
ぴあ 2004年10月28日 (No.1074) 展覧会紹介(斉藤博美)
東京新聞 2004年11月13日 展評(藤田一人)
Metropolis 2004年11月19日 展評(Andrew Conti)
The Asahi Shimbun 2004年11月19日 展評(C. B. Liddell)
UNIVERS DES ARTS JAPON 2004年11月20日発行 展覧会紹介(無署名)
公明新聞 2004年11月30日 展評(藤田一人)
てんとう虫 2004年11月号 「私のベストチョイスART」(城戸真亜子)
美術手帖 2004年11月号 (No.857) 展覧会紹介(無署名)
デイズド&コンフューズド ジャパン 2004年11月号 展覧会紹介(署名:SU)
新美術新聞 2004年12月1日 (No.1042) 「草間彌生展 永遠の現在」(松本透)
朝日新聞 2004年12月1日(夕刊) 展評(西田健作)
日本経済新聞 2004年12月2日 展評(宝玉正彦)
週刊新潮 2004年12月2日号 展覧会紹介(無署名)
読売新聞 2004年12月8日(夕) 「回顧2004 美術」(前田恭二)
The Daily Yomiuri 2004年12月9日 展評(Chiyono Sugiyama)
朝日新聞 2004年12月13日(夕) 「回顧2004 美術」(田中三蔵)
毎日新聞 2004年12月14日(夕刊) 「美術この1年」(三田晴夫)
日本経済新聞 2004年12月14日 「回顧2004 美術」(宝玉正彦)
市民タイムス 2004年12月22日 「聞いた見たり」(古川寿一)
文化庁月報 2004年12月号 展覧会紹介(河本信治)
流行通信 2004年12月号 展覧会紹介(前川あかね)
ミセス 2004年12月号 展覧会紹介(高木陽子)
ぴあ アートワンダーランド 2004年12月10日発行 「ドットがどっと 草間彌生《水玉強迫》」
en taxi 2004年12月27日発行 (No.8) 「宇宙のこころ」(石田千)
Art Monthly Australia 2004年12月-2005年1月号 展覧会紹介
Memo 男の部屋 2004年1月号 展覧会紹介(ジョー・スズキ)
家庭画報 INTERNATIONAL EDITION 2005年1月 Interview (Yayoi Kusama)
タトゥー・パースト 2005年1月号 「芸術Go!Go!」(東谷隆司)
美術手帖 2005年1月号 (.861) 「草間彌生 永遠の現在」(池上ちかこ)

13. アンケート調査

[企画展]

調査期間 平成16年11月25日~平成16年11月28日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 299件(母集団31,961人)有効回答数295人

アンケート結果

・良い94.2%(278件)・普通4.7%(14件)・悪い1.1%(3件)

〔講演会〕

調査期間 平成16年11月13日・平成16年11月28日の2日間
調査方法 講演会入場時に手渡し、終了後回収。
アンケート回収数 57件(母集団31,961人)有効回答数53人
アンケート結果 ・良い88.7%(47件)・普通11.3%(6件)・悪い0.0%(0件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展の特色ある取組みとしては、展覧会開催のために、巡回する4つの美術館との共同研究・調査を行ったことがあげられる。その際に、可能なかぎり出品作品を共通化することによって経費の節減を図りつつ、各館のコンセプトや展示場の特性に応じて展示作品の入れ替えを行い、結果として一つの巡回展の枠組みのもとに4つの視点を提供することができた。また、それらを1冊にまとめた同カタログが美術出版社より書籍化され、展覧会終了後も書店で購入可能となったことも収穫である。

本展は、作者が10歳の時の素描から最近作までを含んでいる点では「回顧展」であるが、展示においては必ずしも時系列に従わずに、各展示室の空間的まとまりに主眼を置いた展示を行った。結果として、草間彌生の半世紀にわたる活動を歴史的に回顧するのではなく、あくまでも、それを現在の視点から見直す企画となったが、多くの展覧会評等を見ても、この企画は好意的に評価されたようである。

草間彌生コレクションを蔵することで知られるコレクター2名と担当者との鼎談形式の講演会については、聴講者の数も多く、現代美術ファンの関心が多極化していることの証左ともなった。

広報については、りそなカード株式会社と連携したポスター、チラシの掲示や、『Flash Art』誌への広告掲載など、これまでにない取組みを行った。

【見直し又は改善を要する点】

一日平均入館者数が約660人という数字は、当館が開催した90年代以降の現代美術家の個展としては過去最高の実績であり、アンケート結果等を見ても、おおむね来館者の期待を上回る個展になった考えられる。しかしながら、草間彌生の知名度や話題性等を考えると、この数字が本当に上限であるのかについては、いささかの疑問が残る。現代美術展としては十分に満足のいく入館者数であるとはいえ、さらに広報・普及効果を上げるにはいかなる方法があるのかは、課題として考えていきたい。

草間彌生の作品は必ずしも難解ではないことから、今回の展示においては、作品キャプションやフロアガイド等、最小限の掲示物しか用意しなかったが、これについては、鑑賞を妨げない範囲で作者の言葉や解説を展示に織り込むなど、見直すべき点があると考えられる。

「痕跡 戦後美術における身体と思考」展（企画展）

方 針

第二次大戦後、現代美術の領域で多くの画期的な表現が生み出された。本展では、1950年代から1970年代後半において、日本、アメリカ、ヨーロッパで創造された表現を、「痕跡」という観点から見直すことにより、多様な作品が秘める共通点と差異、影響関係と独自性を検証するとともに、現代美術に対する新しい見方を提案することを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年1月12日～平成17年2月27日（41日間）

2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー

3. 出品点数 約120件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）

4. 主 催 東京国立近代美術館、京都国立近代美術館
協 力 資生堂、日本航空

5. 入館者数 9,332人（一日平均228人）（目標 11,000人）

6. 入場料金 個人：一般 850円 大学生 450円 高校生 250円
団体：一般 600円 大学生 250円 高校生 100円
前売：一般 700円 大学生 350円 高校生 150円
割引：一般 800円 大学生 400円 高校生 200円

7. 入場料収入 4,661,050円（目標入場料収入 2,907,000円）

8. 担当した研究員数 1人

9. 展覧会の内容

この展覧会は、肖像画や風景画のように「なにかに似ている」ことを原理として成立するのではなく、作家の身体や思考と物質との接触がもたらす、「なにごとかの結果として」生まれたイメージを「痕跡」と名づけ、戦後の現代美術の流れをこうした「痕跡」の系譜として捉えなおすものである。

同展には、日本においては具体美術協会からもの派にいたる一連の動向、アメリカにおいては抽象表現主義からネオ・ダダ、コンセプチュアル・アートにいたる現代美術の主要な動向のほとんどがおさめられ、さらにウィーン・アクションイズムやアナ・メンディエタをはじめとする一連の女性作家など、これまで日本でほとんど紹介されていない作品も集められた。

全体は「表面」「行為」「身体」「物質」「破壊」「転写」「時間」「思考」の8章で構成され、およそ60人の作家、120点におよぶ国も時代も表現のスタイルも異なった動向を「痕跡」という視点から検証することで、戦後美術の大きな流れを支えた、表現を表現として成立させる原点を浮かび上がらせた。

10. 講演会等 実施回数計 1回（年度計画記載回数：講演会1回、ギャラリートーク0回）

参加人数計 95人

1 1 . 広報

通常と同様に、プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、東京メトロ）へのポスターの掲出を行った。また、現代美術展であることを鑑み、都内の美術史研究室を有する大学、美術大学にチラシと招待券を送り、展覧会の周知に努めた。さらに、新聞、インターネット、当館発行のメールマガジン上で招待券プレゼントの広告を掲出し、多数の応募者を得た。メールマガジンを利用した招待券プレゼントは初めての試みであった。

1 2 . 展覧会関連新聞・雑誌記事等

京都新聞 2004年11月27日 「痕跡展 同列にまみえる内外の作品」(岩本敏明)
読売新聞(九州) 2004年12月18日 「視線：過激な前衛作品『痕跡』展で存在感」(小林清人)
「現代詩手帖」第48巻(2005年1月号) 「現代美術の起源へ」(倉石信乃)
「未来」No.461 2005年2月 「『痕跡』の交錯と重層 戦後美術の挑発」(林道郎)
読売新聞 2005年2月11日 「裂く、焼く 『痕跡』の作品展」(前田恭二)

1 3 . アンケート調査

調査期間 平成17年1月27日～平成17年1月30日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 300件(母集団9,332人)有効回答数292件

アンケート結果

・良い75.3%(220件)・普通21.6%(63件)・悪い3.1%(9件)

1 3 - 1 . アンケート調査(講演会)

調査期間 平成17年1月30日 1日間

調査方法 講演会入場時に手渡し、終了後回収。

アンケート回収数 35件(母集団9,332人)有効回答数33件

アンケート結果 ・良い81.8%(27件)・普通9.1%(3件)・悪い9.1%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

「痕跡」というコンセプトの意味の広がりや、120点に及ぶ作品によって8つの章に整理して提示することで、戦後美術史を大胆に読み替えていこうとする本展の試みは、問題提起的であろうとする現代美術展の基本姿勢に立ち返り、新しい美の公準を提案しようとする意欲的なものであったが、多くの展覧会評が示すとおり、その企図は共感をもって受け入れられたと考える。

また、350頁に及ぶカタログは、企画者の長年に及ぶ調査・研究の成果と、海外の研究者の寄稿を含む充実したものであり、20%近いカタログ購入率を記録し完売となった。

【見直し又は改善を要する点】

美術雑誌、新聞の展覧会評での高い評価に反して、観客数の伸びは鈍く、最終的には目標入館者数を下回る結果に終わった。その原因として、第一に「痕跡」というコンセプトが現代美術に馴染みのない観客にとっては難解であったということ、第二にポスター、チラシのデザインが、「痕跡」展の内容を十分に説明するものではなかったということなどが挙げられる。

大学生を狙った広報活動も、1月から2月という冬休みの期間と重なったためか、大きな効果をあげるには至らなかった。

今後、本展のような、京都国立近代美術館との交換展という形態による、最小限の予算で開催する広報活動に

については、開催時期や開催地に見合った広報活動のあり方を検討するなど、再考すべきと考える。印刷経費の節約のため、京都で作成された印刷物をそのまま利用せざるを得ないという制約以前に、両館の担当者が、展覧会の企画段階から広報戦略について議論する機会を設ける必要がある。優れた内容の展覧会であっただけに、「痕跡」という難解な言葉をどうアピールしていくか、そこにもう一工夫できたのではないかと残念でならない。

交換展については、レセプションを開催しないこととしているために、特別招待状が発送されず、このことが、展覧会の周知に関してマイナスに作用したのではないかと考える。

「ゴッホ - 孤高の画家の原風景 ゴッホ美術館 / クレラー = ミュラー美術館所蔵」展 (共催展)

方 針

本展は、近代美術を代表する画家フィンセント・ファン・ゴッホ(1853 - 1890)の実像を改めて紹介しようとするものである。これまで多くの展覧会が開催され、無数の文章が書かれてきたファン・ゴッホは、「狂気」「天才」「情熱」といった形容でもって生涯が伝説化してしまっており、作品も、そうした理解のもとで解釈されがちであった。我が国でも、白樺派以来、そうした傾向が根強い。そこで本展は、伝説化され、孤高の画家となってしまうファン・ゴッホの作品を、19世紀後半の文化・歴史の中で検証することで、画家の本当の姿を浮かび上がらせようとした。具体的には、ファン・ゴッホの作品と同時に、彼が所有していた、あるいは見知っていた作品や資料を展示することで、作品が成立した背景を、視覚的に明らかにすることを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年3月23日～平成17年5月22日(60日間/うち平成16年度開催9日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 出品点数 約120件(うち国宝 0件,重要文化財 0件)
4. 主 催 東京国立近代美術館, NHK, NHKプロモーション, 東京新聞
5. 入館者数 44,044人(一日平均4,894人)(平成16年度中目標43,000人)
6. 入場料金 個人 : 一般 1,500円 大学生 1,000円 高校生 600円
団体 : 一般 1,100円 大学生 700円 高校生 300円
前売 : 一般 1,200円 大学生 800円 高校生 400円
7. 入場料収入 平成17年度に算定
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
フィンセント・ファン・ゴッホの作品を、彼が所有していた、あるいは見知っていた作品・資料と同時に展示した。具体的には、画家となる以前に職業として目指していた宗教への関心、版画の収集などを通じて関心を深めていた労働者への関心(以上、オランダ時代)、印象派、フランス自然主義文学、浮世絵といった同時代の芸術一般の受容(以上、パリ時代)、ユートピアという19世紀的な思想の実践(アルル時代)、巨匠の作品の模写、そして自然の描写(以上、サン=レミ、オーヴェール=シュル=オワーズ時代)に着目した。ファン・ゴッホ作品約40点、関連作家の作品約26点、資料関係約60点が展示された。
10. 講演会等 実施回数計 2回,参加者数 82人(平成16年度中開催の1回分)
(年度計画記載回数:講演会2回,ギャラリートーク0回)
11. 広 報
共催者のNHK, NHKプロモーション, 東京新聞の協力で、外部に広報事務所を設け、プレスリリースの

作成・発送（２回）、事前記者発表（１２月）、記者内見会および記者発表の開催、ＴＶＣＭ、ラジオＣＭの作成・出稿、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（ＪＲ、営団地下鉄、地下鉄）へのポスターの提出、車内吊広告・電飾看板の掲示、チラシ配布、大型書店との連携協力、専門誌・一般誌の特集への編集協力、その他雑誌・新聞（英字紙含む）・テレビ・ラジオ取材への対応などを行った。

12．展覧会関連新聞・雑誌記事等 平成17年度実績報告書に記載

13．アンケート調査 平成17年度実績報告書に記載

【工芸館】

「常設展」

方 針

平成16年度も、常設展は、1.明治以降、およそ百年の近代工芸・デザインの歴史に関する展示、2.各素材別の近代工芸・デザインの名品の展示、3.近代工芸・デザインに関する特別な意味のある時期、運動や特徴的なモチーフをテーマとした展示、という3つの観点から、近代工芸の歩みを分かりやすく概観していただくことを目指した。

また、新たに、工芸館会場の6展示室のうち、所蔵品による常設または企画展示に関わらず、年間を通して、近代を代表する作家の名品を鑑賞していただけるよう、1ないし2室を用いて「人間国宝・巨匠コーナー」を設けた。工芸館の名品紹介と同時に、近代の工芸及びデザインへの理解をさらに深めていただくことを期待するものとした。

実 績

1. 常設展開催状況

平成16年2月10日～平成16年4月11日「近代工芸の名品 花」

(56日間/うち平成16年度11日間)

出品点数：116点(うち重要文化財 0点)

平成16年4月20日～平成16年6月27日「アール・デコの精華」(60日間)

出品点数：81点(うち重要文化財 0点)

平成16年7月3日～平成16年9月5日「動物のモチーフ」(56日間)

出品点数：91点(うち重要文化財 0点)

平成16年12月11日～平成17年2月27日「近代日本の陶芸」(65日間)

出品点数：9点(うち重要文化財 0点)

(同時期に「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」展を開催したため、スペースが限られていた)

平成17年3月8日～平成17年4月17日「人間国宝の花/ 近代工芸の百年」

(38日間/うち平成16年度22日間)

出品点数：133点(うち重要文化財 0点, 登録美術品 1点)

平成16年度 計214日間(所蔵作品展のみの開催期間149日間)

2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館

3. 入館者数 58,075人 (常設展目標入館者数 29,000人)

(うち常設展のみ入館者数 41,330人)

4. 入場料金 一般 200円 大学生 70円 高校生 40円

一般(団体)100円 大学生(団体)40円 高校生(団体)20円

5. 入場料収入 常設展のみの入場料収入 3,157,520円

(目標入場料収入 2,808,000円)

6. アンケート調査

【常設展】

- 第1回 調査期間 平成16年8月12日～平成16年8月15日(4日間)
 調査方法 来館者に手渡し,記述式
 アンケート回収数 300件(母集団 11,393人)有効回答数298人
 アンケート結果
 ・良い87.0%(259件)・普通11.4%(34件)・悪い1.6%(5件)
- 第2回 調査期間 平成17年3月24日～平成17年3月28日(5日間)
 調査方法 来館者に手渡し,記述式
 アンケート回収数 300件(母集団 5,810人,3/31まで)有効回答数 296件
 アンケート結果
 ・良い76.0%(225件)・普通21.6%(64件)・悪い2.4%(7件)

【ギャラリートーク】

(回答数104件)・良い65.4%(68件)・普通28.8%(30件)・悪い5.8%(6件)

自己点検評価

【良かった点,特色ある取組み】

平成16年度から開始した,ボランティアによる「タッチ&トーク」と連動した広報活動を行った。展示作品と同レベルの作品資料を,実際に触れて鑑賞し,さらに展示場で作品解説をする「タッチ&トーク」は,常設展を含めた展覧会の広報を新しい側面から補強することができた。

また,人間国宝や芸術院会員等の名品を鑑賞できる「人間国宝・巨匠コーナー」を開設し,これまで企画展開催中は展示できなかった所蔵名品を,年間を通して展示することができるようにした。さらに,チラシを作成,各所に配布し,工芸館のコレクションの広報を行った。館内配布印刷物では,名品鑑賞の一助となる「鑑賞カード」の充実をはかり,各所に設置した。また展覧会の出品リストは,これまで要望の多かった作品名の読み,素材,技法を記したものを発行した。

また,『近代工芸の案内 - 東京国立近代美術館工芸館のコレクションを中心として』を一般書籍として出版し,当館コレクションの魅力を広くアピールした。

なお,工芸館の所蔵作品の積極的な公開と活用のため,工芸館所蔵作品巡回展の検討を行い,平成17年度から実施することとした。

【見直し又は改善を要する点】

常設展を,季節感や企画性をもたせた内容で開催することによって,より多くの観覧者が得られることとなった。しかし,多数の観覧者が集中した場合や会場でギャラリートーク等の企画を開催した場合,観覧者及び作品の安全のうえでも,狭い施設内での誘導の想定や看視員とのより綿密な打ち合わせを行う必要がある。

「動物のモチーフ」展に関連したワークシート,「動物似顔絵大会」は好評であったが,今後はこうした常設展に関連した児童生徒に対する企画について,より規模を拡大して行っていくべきであると考え。また,子ども・大人双方が楽しめる企画等の組み立ても必要であると考え。

「非情のオブジェ展 - 現代工芸の11人」展（企画展）

方 針

戦後、「用と美」とを旨とする工芸の世界に、全く「用」をもたない純粋な立体造形、いわゆる「オブジェ」と称されるものが現れてから半世紀が経った。この間、工芸はさまざまな角度から見直され、表現に一層の豊かさが加わるとともに、工芸のアイデンティティーの問い直しが試行されたが、近年、それまで展開されてきた主題および外観両面における重厚感の追求とは異なる、すっきりとした軽やかさを特色とする作風が多くみられるようになった。本展はこうした状況に着目し、陶芸、ガラス、染織の各分野において活躍する11名の作品を並べ、多様化を経て到達した工芸の深化したかたちとその意義の検証を目指した。

実 績

1. 開会期間 平成16年9月18日～平成16年12月5日
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 出品点数 76件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 主 催 東京国立近代美術館
5. 入館者数 11,643人（一日平均171人）（目標 11,000人）
6. 入場料金 個人：一般 650円 大学生 350円 高校生 200円
団体：一般 450円 大学生 200円 高校生 100円
前売：一般 550円 大学生 250円 高校生 150円
割引：一般 600円 大学生 300円 高校生 150円
7. 入場料収入 3,053,350円（目標入場料収入 3,566,000円）
8. 担当した研究員数 2人

9. 展覧会の内容

我が国では、近代以降、工芸の自律的価値の探求を指してさまざまな試みが展開されてきた。特に戦後いわゆる「オブジェ」の制作がはじまったことは、工芸の領域の拡大に重要な意義をもたらした。本展では、近年見られるようになった軽やかさとすっきりとした作風に着目し、多様化を経て深化するに至った工芸の現況の検証を目的とした。展覧会名には、初期のオブジェ制作がしばしば隠喩を伴う詩情豊かな世界を評価されたのに対し、文学性や現代美術など他の価値観を排して工芸の本質に挑む制作の姿勢とその作品を表わすために「非情」の語を用いた。会場には若手から既に定評を得て活躍している11名による76件の作品を並べ、世代や素材・技法、形式による差異を超えて共有される価値観の提示を試みた。

10. 講演会等 実施回数計 8回（年度計画記載回数：講演会0回、ギャラリートーク8回）
参加人数計 342人

11. 広報

プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシ

シの発送，鉄道駅（JR，営団地下鉄）へのポスターの提出，車内吊広告，チラシ配布，その他雑誌・新聞取材への対応のほか，関連学科のある大学・専門学校に働きかけ，団体見学の増進を図った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

まいにちミニニュース 268 2004年9月7日 「近代工芸の名品を収集展示」
陶業時報 2004年9月25日 「近代工芸の名品を収集展示する国内唯一の専門館」
毎日新聞（夕刊） 2004年10月4日 「非情のオブジェ11人 国立近代美術館工芸館で」（石川健次）
現代の眼（東京国立近代美術館）548号
「非情のオブジェ 現代工芸の11人」展によせて（不動美里）
「織ることをめぐって」（上原美智子）
「土のかたち」を求めて 虚から延へ」（伊村俊見）
朝日新聞（夕刊） 2004年10月26日 「工芸を問いながら「非情」に」（山盛英司）
Art Outing（web/ACE Japan） 2004年11月5日 「Cool and Light: New Spirit in Craft Making」（Lois Adele Lydens）
中日新聞 2004年11月22日 「心華やぐ工芸品」（井上昇治）
読売新聞（夕刊） 2004年10月27日 「美術館博物館情報 非情のオブジェ」（今井陽子）

13. アンケート調査

調査期間 平成16年10月21日～平成16年10月27日（6日間）

調査方法 来館者に手渡し，記述式（午前・午後各1時間）

アンケート回収数 300件（母集団11,643人）有効回答数294人

アンケート結果

・良い80.0%（235件）・普通17.0%（50件）・悪い3.0%（9件）

自己点検評価

【良かった点，特色ある取組み】

特色ある取組みとして，当館では，これまで素材や形式別の傾向によって展覧会のテーマを設定することが多かったが，本展はそうしたカテゴリーを超えて，現代の工芸の状況を検証することを目指した。そのため，ふだん活動の場を異にする人々の間で情報交換がもたれた点はひとつの成果であった。会場構成でも，あえて素材別・形式別に分類せず，作品それぞれの個性を競わせることによって，来館者の自由な思索の可能性を広げられるよう考慮した。

展示室では，これまでより少し高めの台に作品を設置し，過去の工芸鑑賞の姿勢と異なる視点を提示したが，来館した複数の専門家から有効な試みであるという評価を受けた。

また，現役として活躍中の出品作家にギャラリートークを依頼したことにより，作家志望の学生や若手も多く集まり，現実的な目標としている作家とのあいだで質疑応答が活発に行われたことは，工芸の今後の展開にさまざまな可能性をもたらすものと期待している。

本展では，工芸館の企画展としてははじめてボランティアの導入を行ったが，これにより特殊性の高い企画内容の伝達に一種の親しみやすさが生じ，さらに来館者と一体となって多彩な視点からひとつの問題に取り組むことができたのはたいへん効果的であった。

【見直し又は改善を要する点】

工芸の現況を紹介するにあたり，形式や素材・技法を定めず，また世代にもある程度の幅を持たせたことによって，観覧者に，焦点が絞りにくいとの印象を与えた可能性は否めない。

会場では，出品作家中2名の制作風景を記録したビデオ上映も行ったが，今後は制作風景のビデオの種類を増やして素材・技法への理解を深めるとともに，作家自身の言葉やポートレートを紹介して親近感を抱いてもらうなど，それぞれの展覧会の性格を踏まえつつ，広い層の関心をより掻き立てられるような工夫を凝らし，そうした情報を広報の段階から積極的に周知していく必要がある。

また，アンケートの中で，展覧会タイトルについて，分かりづらいという意見が一部にみられた。「非情」および「オブジェ」という語句がもたらす既成のイメージは強く，工芸の現況に焦点を当てた本展の意図を掴みにく

いとする指摘を真摯に受け止め、記憶に残る個性的なものであると同時に、一般性を有したタイトルによって広く公衆にアピールするよう、今後の重要な検討課題としたい。

本展はまさに進行中の状況を取り上げたものであり、関係者の間でもさまざまな見方があったであろうことから、ギャラリートークとは違った意見交流の場として、今後はシンポジウムや講演会等の試みを検討し、積極的に取り組んでいきたい。

広報については、テーマの特殊性を逆に活かせるよう、当館ホームページ上で展覧会の特集連載を行うなど、多様なアプローチの可能性を提示して、専門家のみならず一般的な観衆にも広く興味を持たれるよう努めていきたい。

「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」展（企画展）

方 針

富本憲吉（1886-1963）は、戦前には個人の美意識に基づく作品の制作を始めた先駆者として活動し、また戦後には、色絵磁器で第1回の重要無形文化財保持者となるなど、日本の近代陶芸の歴史における重要な陶芸家の一人である。本展は、その富本憲吉の活動における、もう一つの側面である量産陶磁器にスポットをあて、広く紹介しようとしたものである。富本が高価な鑑賞のための陶器を制作する一方で、日常のうつわにも強い関心を寄せて積極的にその制作に関わったことはこれまであまり知られていない。生涯にわたって制作を続けた日常のうつわに何を求め、何を伝えようとしたのか、観覧者にその想いを探っていただくことを狙いとした。

実 績

1. 開会期間 平成16年12月11日～平成17年2月27日（65日間）
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 出品点数 140件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
4. 主 催 東京国立近代美術館
5. 入館者数 19,099人（一日平均294人）（目標10,000人）
6. 入場料金 個人：一般 200円 大学生 70円 高校生 40円
団体：一般 100円 大学生 40円 高校生 20円
7. 入場料収入 1,546,970円（目標入場料収入は常設展目標入場料収入に含まれる。）
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
展覧会は二部構成とし、第一部は、富本が制作の拠点とした「大和（安堵）」「東京」「京都」に区分し、本展のテーマに基づく作品を制作年代順に紹介した。展示作品については、：富本の日常のうつわ、：富本創案による量産品、：第二部の作品、：図案・書画などの参考資料、：以外の参考資料に分類し、陶磁作品106件、参考資料34件で構成した。なかでも、全国各地の窯業地に赴き制作した日常のうつわについては、写真資料や関連資料を添えて、制作地や技法などのバリエーションが確認できるように、特に配慮した。第二部は、一般によく知られる色絵金銀彩・白磁・染付の代表作を時代順に展示し、日常のうつわとの関連性や技法上の特徴などを比較できるようにした。また、作品および資料には、できる限り作品解説を付すなど工夫をおこなった。
10. 講演会等 実施回数計 5回（年度計画記載回数：講演会0回、ギャラリートーク5回）
参加人数計 357人
11. 広報
プレスリリースの作成・発送および各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、営団地下鉄）へのポスターの掲出やチラシ配布、新聞への広告の掲出、その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応など

を行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

陶業時報 1501号 2004年11月25日 「もう一つの富本憲吉」

The Japan Times 2004年12月22日 「Dreams for a perfectly set table come true」(Robert Yellin)

文化庁月報 No.435 2004年12月号 「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」(唐澤昌宏)

マナビィ N0.42 2004年12月号 「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」(唐澤昌宏)

現代の眼(東京国立近代美術館)第549号 2004年12月-2005年1月「富本憲吉先生の思い出 京都時代を中心として」(小山喜平)

中日新聞 2005年1月19日 「人間国宝の日常のうつわ展・富本憲吉の創意工夫光る」(高満津子)

読売新聞 2005年1月29日夕刊 「「美」と「用」矛盾に立ち向かう」(前田恭二)

メイプル 81号 2005年1月号 「本日は美術館めぐり 連載9」(久保京子)

日本経済新聞 2005年2月2日 「華麗な作陶支えた量産思想」(竹田博志)

朝日新聞 2005年2月10日夕刊 「生活重視の「民芸」の原点」(田中三蔵)

サライ Vol.17 N0.4 2005年2月17日号 「色絵磁器の名匠 富本憲吉」(菅谷淳夫)

陶磁郎 41号 2005年2月17日発行「やきものの展覧会案内 展覧会にQ&A」(唐澤昌宏)

陶説 623 2005年2月号 「富本憲吉の日常のうつわ」(唐澤昌宏)

目の眼 No.342 2005年3月号 「特集 富本憲吉の美と生活」(辻井喬・唐澤昌宏)

陶説 625 2005年4月号 「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」(外館和子)

13. アンケート調査

調査期間 平成17年1月13日~平成17年1月16日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

アンケート回収数 300件(母集団19,099人)有効回答数298件

アンケート結果

・良い84.3%(251件)・普通14.8%(44件)・悪い0.9%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展の特色ある取組みとして、これまであまり取り上げられることのなかった量産陶磁器のみにスポットをあて積極的に紹介したことで、富本憲吉の新たな側面をしっかりと提示でき、大きな反響を得ることができた。

特に、産地に赴いて制作した作品のバリエーションをできる限り紹介したことで、これまで試作品としての位置づけしかなかった作品群に対し、富本の活動の重要な部分であることの再発見がなされたことは何よりの成果であった。また、作品とともに、作品に関わる参考資料や写真資料をできる限り添えた展示は、鑑賞の一助として大いに役立ったと思われる。

これらのことは、新聞や雑誌等で数多く紹介されたこと、さらには来館者アンケートなどからも読みとれる。

富本にゆかりのある研究者や身近にいた教え子によるギャラリートークは、日常生活のことや書籍などでは得られないエピソードも混じり、富本という作家をより身近に感じてもらうことができ、トークの参加者から大いに喜ばれた。

【見直し又は改善を要する点】

展示の構成が、展示室の形状や展示ケースの関係から量産品の途中に代表作品の展示を行うというものになったため、フロアガイドや各展示室にバナーを掲示するなどの対応を講じたが、作品の位置づけがわかりにくいとの指摘が寄せられた。今後の展示プランを考える上で検討課題としたい。

会場ではこれまで以上に作品解説を付けたつもりであったが、それでも足りないとの意見が聞かれた。今回の

展示内容のような、ごく限られたテーマに絞ったものでは鑑賞の一助である解説はさらに工夫が必要になると思われ、今後の教訓として生かしていきたい。

外部講師のギャラリートークは好評であった反面、参加者が展示室いっぱいに広がり、トークに参加しない観覧者の鑑賞の妨げとなった。また、参加者からの声が聞こえない、作品が見えないなどの苦情に対しては、今後は、観覧者の導線の確保、マイクなどの音声装置の配置を考えるなど、よりよい方策を検討していきたい。

「河野鷹思のグラフィック・デザイン 都会とユーモア」展

方 針

戦前から戦後にかけて、グラフィック・デザインの分野で傑出した活躍をなした河野鷹思の偉業を回顧するものである。河野は、時代に即応した新しい生活とその根底に流れる日本の伝統的な感性を融合させた個人的な作風と多彩な表現活動によって、日本のグラフィック・デザイン史のなかで重要な位置を占めている。本展では、観覧者に日本のグラフィック・デザインの発展に大きな足跡を残した河野鷹思の制作を示すとともに、グラフィック・デザインの今日的な意義を探っていただくことを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成17年1月12日(水)～平成17年2月27日(日)(41日間)

2. 会 場 東京国立近代美術館本館 ギャラリー4

3. 出品点数 111件(うち国宝 0件, 重要文化財 0件)

4. 主 催 東京国立近代美術館

5. 入館者数 12,147人(一日平均296人)(目標 9,000人)

6. 入場料金 個人：一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
団体：一般 210円 大学生 70円 高校生 40円

7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。

8. 担当した研究員数 2人

9. 展覧会の内容

河野鷹思は、日本のグラフィック・デザインの黎明期から確立期にかけて活動した。その軌跡を戦前の松竹キネマ宣伝部に所属し制作したポスターや雑誌広告から、戦後の日宣美(日本宣伝美術会)展に出品された作品まで、代表作を含む111件で展示した。河野の活動は、作品の様式から大きく戦前と戦後の2つに分けられるが、作品の根底に流れる河野のデザインの特質は変わらないため、とくにはっきりとした区分をもうけず、作品の様式の変遷が一望できるような展示構成をとった。今日でいうグラフィック・デザインの範疇にとどまらない多彩な活動 舞台デザイン、ディスプレイデザイン等 を展開した作家でもあるため、そうした活動の幅広さを示すために、画像・映像資料を作成し、会場にて紹介した。

10. 講演会等 実施回数計 4回(年度計画記載回数：講演会0回, ギャラリートーク回)
参加人数計 159人

11. 広報

プレスリリースの作成・発送, 記者内見会および記者発表の開催, 各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送, 鉄道駅(JR, 営団地下鉄)へのポスターの提出, チラシ配布, その他雑誌・新聞取材への対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

現代の眼（東京国立近代美術館） 第549号（2004 2005年12-1月）

「河野鷹思さん追思」（臼田捷治）

現代の眼（東京国立近代美術館） 第549号（2004 2005年12-1月）

「映画と河野鷹思」（田中真澄）

産経新聞 2005年2月1日 「卓越したエスプリのセンス」（生田誠）

朝日新聞 2005年2月10日 「[美術] 河野鷹思展 皮肉利いたデザイン」（西田健作）

DTP WORLD 第81号（2005年3月号） 「河野鷹思のグラフィック・デザイン」（無記名）

13. アンケート調査

調査期間 平成17年2月10日～平成17年2月13日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

アンケート回収数 300件（母集団 12,147人） 有効回答数 297人

アンケート結果

・良い 86.8%（258件）・普通 12.5%（37件）・悪い 0.7%（2件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

これまで当館ではグラフィック・デザイナーの個展として、亀倉雄策、田中一光などの戦後を代表する作家と、グラフィック・デザインの黎明期に中心的な役割を果たした杉浦非水を取り上げてきた。今回はグラフィック・デザインを取り上げた展覧会としては3年ぶりの開催となるが、そうした戦前と戦後という2つの時代をつなぐ役割を果たした重要な作家として河野鷹思を取り上げることができた。これにより徐々にグラフィック・デザインを体系的にとらえる研究の基盤が整いつつあり、この点で前進が見られたと思う。

広報については、開催期間が重なった富本憲吉展（工芸館）および痕跡展（本館）とタイアップして一部広報（新聞に展覧会情報掲出、駅ばり）を行ったことにより、効率的な広報活動ができた。これは、広告経費を軽減することになった。また、複数の展覧会のポスターを並列して掲示することにより、当館での多彩な展覧会活動を広く一般にアピールし、宣伝効果もいっそう高まったと思われる。

【見直し又は改善を要する点】

会場が手狭であった為、プロダクトやインテリアといった河野の多岐にわたる活動の全体像を紹介するに至らなかった。業績において重要と思われる資料を、映像・画像資料として展示することで解決を試みたが、制約のある会場で作家像をどう提示するかについて、配慮と工夫を重ねたい。

広報については、ポスター、チラシ等をデザイン系の専門学校、予備校を含む教育機関を中心に行ったが、グラフィック・デザインという範囲を超えてのアピール度が足りなかったように思われる。今後は、企業とのタイアップなどさまざまな広報活動のあり方を探ってみたい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

貸与・特別観覧の件

(1) 本館

ア. 貸 与 79件(264点)

イ. 特別観覧 189件(725点)

(2) 工芸館

ア. 貸 与 40件(126点)

イ. 特別観覧 44件(153点)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

本館：平成16年度も例年どおり多数の作品を貸し出すことができ、各美術館の活動の充実に寄与したと考える。

また、海外の展覧会への貸し出しもあり、日本文化の海外普及にも成果があった。

特別観覧の件数の推移については増加傾向にあるが、画集等の単行本が主流であった時代に比べ雑誌新聞等、美術作品が紹介される媒体が幅広くなったことが背景にあると思われる。

工芸館：平成16年度の貸出件数は、増加傾向であるとともに多岐の素材分野にわたるようになってきた。これは、前年度末に工芸館の所蔵品目録『工芸』、『デザイン』を発行したことにより、所蔵作品が美術館等に広く知られることとなったことによるものであると考える。同様に、特別観覧の件数も増加しつつあり、工芸館の専門家や学生に対する熟覧の事業についても広く普及してきたように思われる。

【見直し又は改善を要する点】

本館：貸し出しについては、従来から作品の状態、常設展での使用頻度、巡回先の数などを考慮し、作品の保全に配慮しているが、近年、各地からの貸出依頼が増加しており、調整が難しくなっている。また、貸与に関わる諸々の作業量の増大が研究員への過大な負担を招きつつある。

特別観覧については、その多くが商業利用であることから、現今の社会的な基準に照らして料金を改定することも検討すべきと考える。

工芸館：作品貸与の申請件数、点数のいずれも増加する一方であり、状態保全に留意を要する作品への申請、貸与希望作品の重複、同一作品への連続した貸与申請等も見られる。

多くの貸与申請に対応するためにも、今後は、作品保全や当館の常設展計画ともあわせて、より計画的な展示と綿密な貸出調整が必要と考える。

* 添付資料 貸与件数等の推移(事業実績統計表 p.8)

特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

収蔵品に関する調査研究

美術作品に関する調査研究

収集・保管・展示に関する調査研究

美術史、美術動向、作者に関する調査研究

世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(2)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

詳細は「事業実績統計表 調査研究一覧」を参照のこと。

2. 客員研究員等の招聘実績 本館 1名(年度計画記載人数: 1人)

工芸館 1名(年度計画記載人数: 1人)

3. 調査研究費 予算額 40,923,000円 決算額 33,187,662円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：館の調査研究活動は上記分野にわたり、その成果は展覧会活動、出版物、報告書等で随時発表したが、平成16年度は「琳派 RIMPA」展に際して、当館としては初めて国際シンポジウムを開催し、研究成果の公表と意見交換等に寄与しえた点が特筆される。また、平成16年度より客員研究員1名(美術課写真係)を採用し、所蔵する写真プリントの閲覧等に対応できる体勢を整えた。

展覧会のための調査研究については、平成16年度は「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展で京都国立近代美術館と、草間彌生展で京都国立近代美術館、広島市現代美術館、熊本市現代美術館、松本市美術館と、「痕跡 戦後美術における身体と思考」展で京都国立近代美術館と、ゴッホ展で国立国際美術館、愛知県美術館と共催し、共同で研究調査を進めたほか、平成17年度の小林古径展(京都国立近代美術館)、「アジアのキュビズム」展(ソウル国立現代美術館、シンガポール美術館)、「ドイツ写真の現在」展(京都国立近代美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)等のための調査研究を共同で進めた。いずれも積極的な資料や情報交換が行われ、非常に有意義であった。今後も、展覧会の組織形態に即してこうした共同研究を進めたいと考えている。

科学研究費補助金による「日本文化の多重構造 近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年 - 1980年」については、最終年度である本年度、その研究成果報告書を作成した。また、平成16年度より「戦後の日本における芸術とテクノロジー」のテーマで同じく科学研究費補助金の助成を受け、井口壽乃氏(埼玉大学教養学部)ほかとの共同で、関連分野の資料収集やデジタル・ベース化の作業等を開始した。

保存修理に関する調査研究については、昨年度の評価委員会の指摘を受けて、修復データへの4館共通アクセスを、国立美術館所蔵作品総合目録検索システム上で実現した。

なお、本年度は、蔵屋美香主任研究官が文部科学省在外研究員制度によって6ヶ月間(9 - 3月)にわたって

ロンドン（英国）ほかに滞在し、近現代美術の調査研究等に当たった。

工芸館：平成16年度は「現代に生かされた古典」、「近代工芸・デザインの名品」をテーマに二つの工芸関係雑誌で連載（月間）を行い、広報を兼ね、計24件の所蔵作品研究を行った。また、工芸館に関する教育普及、ボランティア活動についての調査研究の実施のため、客員研究員1名を招聘した。

さらに、日ごろの各研究員、客員研究員の研究成果は、東洋陶磁学会（4件、於当館講堂）、研究集会「日本の陶芸：伝統と現代(Japanese Ceramics: Cultural Roots and Contemporary Expressions)」(1名参加、ハーバード大学)などにおいて発表し、内外の研究者との研究交流を積極的に行った。

大和日英基金の助成により現代イギリス陶芸の研究においてもイギリスの研究者、陶芸家との研究交流を行った。また当館研究紀要（2名執筆）にも発表している。

なお、本年度は、今井陽子主任研究官が文部科学省生涯学習政策局の「平成16年度学芸員等在外派遣研修」によって4ヶ月間（11月-2月）にわたってロンドン（英国）ほかに滞在し、近現代の工芸の調査研究等に当たった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：美術館研究員の場合、主たる研究成果は展覧会や展覧会カタログの形で発表されるのが通例であるが、近年では学会や講演会等で発表するケースも見られるようになっており、今後とも、研究成果の外部への積極的な公表を促進することとしたい。

工芸館：広報と所蔵作品研究を兼ねた美術・工芸雑誌連載は一定の成果を収めつつあるが、まだまだ不十分であり、今後とも拡大していく方向で考えたい。また、今年も学会や海外の研究集会などで内外の研究者との交流が進んだが、研究者、工芸家を含めて、近現代工芸研究は日本、イギリスを中心とした欧州でこの間急速に進んできており、より一層の深い研究交流が望まれる。このことによって当館の研究レベルをより一層伸ばして行きたい。

*添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.47）

4 . 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートークを実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方 針

教育普及活動は美術館の持つ情報をさまざまな形で提供することで、広く人々に美術への関心と理解を高めてもらい、美術館をより身近なものとして感じ、美術館の愛好者となってもらうことを大きな狙いとしている。そのため手段、方法は種々考えられるが、対象となる層は子どもから大人まで、また美術館未経験者から専門家まで多岐にわたっており、それぞれに対してきめのこまかな対応をする必要がある。

その中で、工芸は本来「用」に結びついた歴史を持ち、素材・技法の違いで作品の傾向が大きく異なってくる。こうした工芸の特性に配慮し、当館研究員のほか、出品作家によるギャラリートーク、ボランティアによる「タッチ&トーク」などでは、より制作過程、素材に着目した教育普及活動を目指した。

実 績（総括表）

(1) - 1 資料の収集及び公開

[本館]

収集件数 4,809件

公開場所 本館アトライブラリ(本館2階)

利用者数 2,781人

公開件数 8,933件

[工芸館]

収集件数 1,144件

公開場所 工芸館図書閲覧室(工芸館1階)

利用者数 438人

公開件数 1,775件

(1) - 2 広報活動の状況

刊行物による広報活動 9種

ア. 美術館ニュース「現代の眼」

イ. ミュージアムカレンダー(展覧会予定表)和文版・英文版

ウ. 年報

エ. 展覧会図録

オ. 出品目録・フロアガイド

カ. 研究紀要

キ. 概要

ク. パンフレット(館案内)和文版・英文版

ケ. その他一般出版物

「東京国立近代美術館所蔵作品名品選 20世紀の絵画」

「近代工芸案内 - 東京国立近代美術館工芸館コレクションを中心として」

ホームページ(美術館情報システム)による広報活動

本館・工芸館のホームページにおいては、画面上の展覧会情報に会場風景、作品図版、各種トピック及び用語解説(工芸作品)を掲載するほか、最新情報(「トピックス」欄)、講演会・ギャラリートーク等イベント情報(「イベント」欄)、「こどものページ」等の充実を引き続き図り、本館・工芸館の所蔵品・展覧会の普及や、春休み等の児童生徒向けプログラムの告知等に努めた。さらに、更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに、インターネットにおける情報検索時の露出を向上させるよう努めた。

メールマガジンの発行(毎月発行)に関しても、展示作品や展示予告、各種イベントの案内を始めとして、来館者のニーズに迅速に対応し、美術館の側から積極的に配信するよう努めた。

マスメディアの利用による広報活動

本館では、各展覧会開催に際して、雑誌(美術専門誌や情報誌)・新聞・テレビ向けの資料(プレス・リリース)にカラー印刷による図版を掲載し、見所を簡潔に要約するなど、その充実を図った。また、代表的な情報誌「ぴあ」の展覧会紹介欄を年間枠で買い取り、定期的な広報媒体とするなど、広報力の強化を図った。

工芸館では、広報誌に所蔵品を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図った。さらには、中央区の区民講座と提携し、「非情のオブジェ」展開催中に「伝統文化を楽しむ」と題して5回の伝統工芸関連の連続講座を受け持ち、広報活動につなげた。

(1) - 3 デジタル化の状況

本館 平成16年度にデジタル化した美術作品の件数 480件

工芸館 平成16年度にデジタル化した美術作品の件数 440件

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

児童生徒を対象とした事業を次のように行った。

(各事業の詳細は「(2) - 1 児童生徒を対象とした事業」p 6 3を参照のこと。)

[本館]

申し込みに基づく随時の講演会，ギャラリートーク，職場見学の受入れ等
教職員研修会

ボランティアによる小・中学生向けプログラム

当館ホームページ内「こどものページ」

ボランティアによる子ども向けギャラリートーク（所蔵作品解説）

[工芸館]

申し込みに基づく随時の講演会，ギャラリートーク，職場見学の受入れ等
当館ホームページ内「こども工芸館」

所蔵作品展「動物のモチーフ」に関連した，児童生徒を対象としたワークショップの実施，及びワーク
シートの配布

ボランティアによる子ども向けギャラリートーク（所蔵作品解説）

(2) - 2 講演会等の事業

(各事業の詳細は「(2) - 2 講演会等の事業」p 6 6を参照のこと。)

[本館]

講演会・シンポジウム	19回	1,931人
ギャラリートーク（研究員による）	33回	1,162人
所蔵品ガイド（ボランティアによる）	247回	3,005人
パフォーマンス	1回	146人
コンサート（無料）	1回	200人
東京国立近代美術館コンサート（有料）	3回	490人

[工芸館]

ギャラリートーク	33回	1,100人
対談	1回	83人
ワークショップ	1回	15人
タッチ&トーク（ボランティアによる）	69回	902人・966人
こどもタッチ&トーク（ボランティアによる）	5回	63人
英語タッチ&トーク（ボランティアによる）	2回	14人

(3) - 1 研修の取組

本館・工芸館 平成16年度は，国立美術館キュレーター実務研修生の受け入れなし。

(3) - 2 大学等との連携

(詳細は「(3) - 2 大学棟との連携」p 7 2を参照のこと。)

本館，工芸館ともに，博物館実習生の受け入れを行った。工芸館では美術大学等と協力関係を結び，個別にギャラリートークや熟覧等の機会を設けるとともに，授業の一環として館内での作品観賞を行った。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

(詳細は「(3) - 3 ボランティアの活用状況」p 7 4を参照のこと。)

[本館]登録人数：20名

活動内容：常設展開催期間中の毎日、「MOMATガイドスタッフによる所蔵品ガイド」を実施。
その他に、小・中学生や生涯学習団体へのギャラリートークを実施。

[工芸館]登録人数：19名

活動内容：平成16年6月9日から展覧会での解説および触知による作品鑑賞補助のための「工芸館ガイドスタッフ」による「タッチ&トーク」を実施。

(4) 渉外活動

(詳細は「(4) 渉外活動」p76を参照のこと。)

展覧会において各企業から協賛、協力を得たほか、本館では「琳派 RIMPA」展で国際シンポジウムを開催するに当たって、ポーラ美術振興財団から助成を受けた。

また、外部団体からの支援等を受けるために、新たに賛助会制度を導入した。

(5) 教育普及経費 予算額 117,790,000円 決算額 94,726,048円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：本年度は、とりわけ以下の事業の新設や充実に努めた。

資料の収集及び公開については、当館・東京都現代美術館・横浜美術館のライブラリを結ぶ美術図書館横断検索ALC(Art Libraries' Consortium)に、新たに国立西洋美術館のそれを接続すべく、準備と試行を開始した。

デジタル画像の公開については、継続的なデジタル画像の作成に努めるとともに、特に、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館と協同で独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム(試行版)を構築し、3月1日に暫定公開して、4館の所蔵作品を一括して検索可能なシステムを稼働させた。

アートライブラリの利用に関しては、収集資料件数、利用者数(入室者数)、公開請求件数、いずれも前年度から増加の傾向にあり、上記ALCの効果が、特に公開資料数(閉架書庫からの出納資料件数。1,067件から1,775件に増加)に現れていると考える。

児童生徒を対象としたプログラムとしては、春季・夏季休暇期間の「こども美術館」等の実践を通じて子ども向けトークのスキルを向上させたボランティアが、本年度から、授業等での来館児童への対応を開始した。今後もボランティアの協力を得ながら、学校からの団体受け入れ等への対応能力の拡充を図りたい。

学校との連携については、ゴッホ展を機に小・中・高校の教師向けの「教職員研修会」を開始した。また、都立飛鳥高校の単位制授業への協力、玉川大学芸術学部との連携、鳴門教育大学との文部科学省科学研究費助成の申請など、複数の事業を開始すべく準備や検討を開始した。

また、光村推古書院と共同で『東京国立近代美術館所蔵名品選 20世紀の絵画』を一般書籍として出版し、当館コレクションの魅力を広くアピールした。

工芸館：ギャラリートークのテーマを各担当者間で調整し、同一展示を様々な側面(歴史、名品、現代の動向、トピックスなど)から見られるように配慮した。

工芸の大きな特性である「素材感」を実際に味わってもらい、理解を深めようと、工芸館ガイドスタッフによる「タッチ&トーク」を開始し、研究員のトークにおいてもなるべく実物に触れてもらうよう配慮した。

特殊な用語を用いる工芸作品名の読みについて、全作品の振り仮名を分節ごとに分けて表記したリストを毎回配布した。さらに近代工芸の全貌をわかりやすくコンパクトに解説した『近代工芸案内-東京国立近代美術館芸館コレクションを中心として』を出版し、当館コレクションの魅力を広くアピールした。

【見直し又は改善を要する点】

本館：本館，工芸館を通じて，館内での映像による美術館案内や作品紹介が少ない。本館のビデオコーナーのソフトについては，平成16年度，「近代日本の洋画 東京国立近代美術館のコレクションから」と題する作品解説主体のプログラムを制作した。また，アートライブラリは，前年度に比べて利用者は微増しているものの，なお一層の広報が必要だと考えている。

美術館の支援組織として，平成16年度には，賛助会員制度を導入したが，会員の継続，拡大等について検討が必要である。

工芸館：作品に触れてもらうための所蔵品同等の参考作品が不足している。「タッチ&トーク」プログラムの一層の充実のためには，所蔵品と同程度の質を持った優れた参考作品を各素材，分野ごとに充実していくことが急務である。

*添付資料

教育普及件数の推移（事業実績統計表p.11）

(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

- (1) 本館 件数 4,809件
(2) 工芸館 件数 1,144件

2. 公開

(1) 本館

- 公開場所 アートライブラリ(本館2階)
公開日数 223日間
公開件数 ・公開資料数 8,933件
 ・公開請求件数 1,652件
利用者数 2,781人

(2) 工芸館

- 公開場所 工芸館図書閲覧室(工芸館1階)
公開日数 170日間
公開件数 ・公開資料数 1,775件
 ・公開請求件数 438件
利用者数 438人

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：平成15年3月に公開した美術図書館横断検索ALCは順調に稼動しており、その影響からか、閉架資料の公開資料数が大幅に拡大している(5,545件から8,933件に増加)。

また、昨年11月、OPAC(公開図書検索システム)をバージョンアップして、多言語対応とし、音標符号文字、簡体字、ハングルの表示を可能にすることによって、より正確な書誌情報の提供につとめた。

当館のアートライブラリについては、ALCの紹介とともに、『図書館雑誌』(日本図書館協会)ほかの専門誌、および全国紙(『朝日新聞』)において広報された。

工芸館：平成16年度の図書室利用者は、前年度の約1.7倍に増加した(1,047件から1,775件に増加)。このことは、図書閲覧室の存在が次第に認知されてきたことや、新たに導入した工芸館ガイドスタッフによって蔵書が活発に利用されていることを示している。

今後も、工芸やデザインに関する書籍や雑誌、さらには作家の個展カタログやリーフレット等一般では入手し難い資料にも注意を払い、継続的な収集を行っていきたい。

【見直し又は改善を要する点】

本館：利用者の増加傾向は継続しているが、引き続き、資料の収集整備と併せて、ホームページその他の媒体を活用しながら広報し、利用の促進に努めていきたい。

前年度に実現した美術図書館の横断検索については、平成16年度中に国立西洋美術館の試行的参加が実現しており、次年度も同様に参加館を増やし、横断検索の可能範囲をさらに広められるよう努めたい。

書誌データの蓄積についても、図書・カタログ・雑誌の基本的な書誌情報に加えて、より文献の内容を反映する個々の目次情報について、継続してデータ量を拡大させる必要がある。

工芸館：工芸・デザイン関係の書誌を体系的に収集している施設は国内でも稀有であり、工芸館図書室に対する研究者、愛好家の注目度は高い。次年度以降も引き続き資料の充実を図るとともに、今後はさらに、グローバルな視点で工芸作品を捉えられるよう、海外作家や作品の図書資料収集にも力を入れていきたい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実 績

1. 刊行物による広報

(1) 美術館ニュース「現代の眼」

発行 偶数月発行（発行回数6回，発行部数6冊）（年度計画記載発行回数6回）

料金 350円

配布先 運営委員等，都道府県の中央図書館，大学附属図書館，都道府県渉外学習センター，研究機関等

特記事項 従来の本館・工芸館の特別展・企画展に連動した特集や作品研究に加えて，平成16年度は，所蔵作品展にちなむ記事や教育普及事業のレポート，新収蔵作品の紹介等を掲載。企画展以外の活動も積極的に紹介する編集を心がけた。

(2) ミュージアムカレンダー（展覧会予定表）和文版・英文版

発行 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

料金 無償

配布先 会場内配布，都内の小中学校等

(3) 年報

発行 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

料金 無償

配布先 大学附属図書館・研究機関等

(4) 展覧会図録

「ブラジル ボディ・ノスタルジア」展図録 料金 1,200円

「琳派 RIMPA」展図録 料金 2,500円

「木村伊兵衛」展図録 料金 1,700円

「草間彌生 - 永遠の現在」展図録 料金 2,200円

「痕跡 戦後美術における身体と思考」展図録 料金 2,000円

「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」展図録 料金 2,300円

「非情のオブジェ」展図録 料金 1,300円

「人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉」展図録 料金 1,300円

「河野鷹思のデザイン」展図録 料金 1,300円

(5) 出品目録・フロアガイド他

発行 常設展（所蔵作品展），企画展開催時

料金 無償

配布先 会場内配布

[本館]

- ア．所蔵作品展「近代日本の美術」 会場案内
- イ．ブラジル：ボディ・ノスタルジア 作品解説
- ウ．琳派 RIMPA展 出品目録 フロアマップ
- エ．木村伊兵衛展 Floor Guide
- オ．草間彌生：永遠の現在 Floor Guide
- カ．ゴッホ展 - 孤高の画家の原風景 展示構成（章解説）
- キ．ゴッホ展 こどもセルフガイド

[工芸館]

- ア．所蔵作品展 アール・デコの精華 出品目録・フロアガイド
- イ．所蔵作品展 動物のモチーフ 出品目録・フロアガイド
- ウ．たんけん！こども工芸館 わたしをさがして ワークシート
- エ．非情のオブジェ 現代工芸の11人 出品目録・フロアガイド
- オ．人間国宝の日常のうつわ もう一つの富本憲吉
同時開催 所蔵作品展 近代日本の陶芸 出品目録・フロアガイド
- カ．所蔵作品展 人間国宝の花ノ 近代工芸の百年 出品目録

(6) 研究紀要

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）
料金 無償
配布先 大学，研究機関等

(7) 概要

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）
料金 無償
配布先 美術館，区内学校，研究機関等

(8) パンフレット（館案内）（日本語版，英語版）

発行年月日 1回発行（発行回数1回）
料金 無償
配布先 会場内配布，問い合わせへの対応

(9) その他出版物

東京国立近代美術館所蔵作品名品選 20世紀の絵画 料金 2,500円
近代工芸案内 東京国立近代美術館工芸館コレクションを中心として 料金 900円

2. インターネットを用いた広報

ホームページ（展覧会スケジュール等に連動して更新，随時小更新）

本館・工芸館のホームページにおいては，画面上の展覧会情報に会場風景，作品図版，各種トピックス及び用語解説（工芸作品）を掲載するほか，最新情報（「トピックス」欄）や，講演会・ギャラリートーク等イベント情報（「イベント」欄），「こどものページ」の充実を図り，本館・工芸館の所蔵品・展覧会の普及や，児童生徒向けプログラムの告知に努めた。さらに，更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに，インターネットにおける情報検索時の露出を向上させるよう努めた。

メールマガジン（毎月発行）

展示作品や展示予告を始めとして、来館者のニーズに対して、美術館の側から積極的に配信するメディアとして引き続き発行した。

美術館情報システムによる広報活動

平成7年度から、国立情報学研究所による学術情報ネットワークを介し、インターネット上に東京国立近代美術館ホームページを開設しており、平成16年度も各種展覧会、上映会、講演会などの催事情報の提供に努めた。8月には、館概要と展覧会情報を掲載した多言語ページ（英、独、仏、中、韓）を開設した。前年度同様、日替わり情報を掲載して、迅速かつ最新の情報を提供し、メールマガジンを月刊で刊行した。

当館の蔵書検索システムをバージョンアップして、多言語化し、さらに、国立美術館4館と共同して、4館の所蔵作品の一括検索を可能とする、「独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム（試行版）」を公開するなど、作品および資料情報の提供の高度化を図った。

3. その他の広報

[本館]

プレス関係の画像の貸出をデジタルデータに統一することで、広報活動の利便性を向上させ、プレス側からのさまざまな要望に柔軟に応えられるようした。

代表的な情報誌「びあ」の展覧会紹介欄を年間で13枠買い取り、定常的な広報媒体とした。年間契約とすることによって、講演会情報の告知における優先権などを得た。

朝日新聞マリオン欄（12月31日付け）に、年始開館（1月2日から）の告知記事を掲載した。

各展覧会の性格に応じた広報活動に努めた。一例として、「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展においては、東京メトロとタイアップしたポスターの制作・展示や、レストラン、ファッション店舗をターゲットにしたポストカードの制作・配布を行った。

特別展のポスターを、最寄り駅に通じる東西線と京王線及びJRの駅以外に、展覧会によっては六本木・表参道駅などにおいても掲示した。

東京メトロ株式会社及び小田急電鉄株式会社と提携し、美術館の施設情報を掲載したポスターを同路線各駅に掲示した。また、メトロニュース・チラシ等へも情報を掲載した。

朝日新聞社が発行する週間朝日百科「日本の美術館を楽しむNO.16」に東京国立近代美術館、工芸館、フィルムセンターのコレクションを紹介した。

近隣施設（国立公文書館、科学技術館、三の丸尚蔵館）と連携し、各館の紹介・展覧会事業等を掲載した「北の丸公園・皇居東御苑文化ゾーンマップ」を作成、来館者及び観光施設等へ配布した。

りそなカード株式会社と連携し、会報誌に「草間彌生」展の情報を掲載した他、りそな銀行各支店でポスター等の掲示を行った。

[工芸館] 工芸館では、次の3誌に所蔵品等を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図った。

「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』

その月の展覧出品作のなかから一点名品を選び、その見所、歴史的意義、作家のプロフィールなどを解説した。

「古典が息づく現代の工芸 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』

所蔵作品の中から名品を一点選び、古典がどのように生かされ、作品制作と結びついているかの解説を行った。

「展覧会情報」『ICLUB』

伊勢丹の発行する在日外国人向け広報誌に情報を提供し、各号で展覧会広報を行った。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：「現代の眼」については、本館・工芸館の特別展・企画展に連動した特集を組み、各会期に合わせた発行時期を設定するとともに、展覧会の副読本ともなるような編集を心がけた。また、定期購読者に対する特典を設けて、その旨をチラシ等により広報し、定期購読者の拡大に努めた。

光村推古書院と共同で刊行した『東京国立近代美術館所蔵名品展 20世紀の絵画』は、一般書籍として出版し、当館コレクションの魅力を広くアピールした。

また、昨年度より配信を始めたメールマガジンの購読者数は、平成16年3月末現在で1,900人(昨年度末実績約1,000人)を超えており、当館の活動に継続的な関心を持つ人への広報手段として、またそうした人を増やす手段として、今後も内容を拡充するなど、発展的に活用していきたい。

近隣施設(国立公文書館、科学技術館、三の丸尚蔵館)と連携し、各館の紹介・展覧会事業等を掲載した「北の丸公園・皇居東御苑文化ゾーンマップ」を作成、来館者及び観光施設等へ配布し、好評を得た。

工芸館：一般書籍として出版した『近代工芸案内 - 東京国立近代美術館工芸館コレクションを中心として』は、近代工芸の全貌を分かりやすく解説し、その流れを主に当館所蔵の名品でたどれるもので、縄文から現代までの簡単な工芸史も付している。8割の部分には英訳を施し、海外発信にも用いることができるようになっており、外国人来館者にも対応できるものである。今後、国内外への工芸館の広報媒体としても、大いに活用できるものとなった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：インターネットを用いたメールマガジンについては、登録者数も前年度比でほぼ倍増しており、今後ますます重要となる広報媒体と考えられる。しかし、同媒体は、技術上、デザイン上の専門スタッフを要する新しい活動分野であり、現在は既存職員(研究員及びコンピューター・システム管理担当者)が他業務の合間に対応しているのが現状である。今後その一層の充実を図るためには、担当者の配置を含めて検討すべき問題がある。

工芸館：展覧会情報については、新聞等の展覧会紹介において、コンスタントに取り上げられるようになってきているが、入館者数を見ると、普及広報の効果はまだ不十分である。引き続き新聞、雑誌、テレビ等に働きかけは継続的に行うとともに、工芸の性格上、単にマスコミの学芸、展覧会担当のみならず、婦人・家庭欄、生活情報関係部署にも広く広報していくことが重要であろう。

また、工芸関係の定期刊行物に近代工芸の記事を提供し、その代わりに展覧会の紹介を掲載してもらおう「3. その他の広報」に記したようなタイアップの連載を増やしていくことも効果的であり、重要である。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (1)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実 績

1. 所蔵作品のデジタル化

(1) 本館

平成16年度にデジタル化した美術作品の件数	480件
平成16年度末収蔵作品数	9,135件
平成16年度末デジタル化作品数	8,689件
	(カラー：3,160画像 白黒：10,440画像)
今後のデジタル化の対応	毎年500件をデジタル化予定

(2) 工芸館

平成16年度にデジタル化した工芸作品の件数	440件
平成16年度末収蔵作品数	2,468件
平成16年度末デジタル化作品数	2,414件
	(カラー：1,440画像 白黒：1,440画像)
今後のデジタル化の対応	毎年400件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 6,972,764件
(平成12年度アクセス件数 129,602件)

3. デジタル化した情報の公開

(1) 本館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 7,417件
(館内：5,767件 館外：1,650件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 9,528件

(2) 工芸館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 179件(館内：103件 館外：76件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 2,518件

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：平成16年度は、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館と共同して、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム（試行版）を公開した。このシステムは、独立行政法人国立美術館の4館の所蔵作品の一括検索を可能とするものであり、当館は本館8,951件(内、画像を持つもの1,380)、工芸館2,514件(内、画像を持つもの20)を掲出した。今後、新規受入作品について、文字、画像とも

にデータを拡充する予定である。

なお、文化遺産オンラインへの次年度以降の対応としては、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムから4館データを一括して提供することを予定しており、そのためのアプリケーション開発および国立情報学研究所との調整を図っていききたい。

工芸館：デジタル化の進展を反映して、ホームページへの所蔵作品展の情報の掲載では、できるだけ多くの作品の画像を含めた紹介が可能になっている。今後もより充実していききたい。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ホームページでは、基本文字データのデータベース検索システムを公開しているが、デジタル画像については、著作権が切れた作品、もしくは当館の代表的な作品として「とうきんびコレクション」に選定し、ホームページ上での公開について特に許諾を得たものに限り、公開するにとどまっている。著作権の切れた作品については、平成16年度同様、ホームページの所蔵作品検索システムにおいて、デジタル画像を公開表示するように努める。あわせて、作家・作品の解説文の蓄積を拡大して、一層の情報提供に努める。

工芸館：画像及び文字情報のデジタル化については、今後も継続的に努力していききたい。展覧会情報については、前年度以上の情報量を掲載することができたが、工芸の用語解説などの基礎知識の更新を実施しておらず、作品、作家、工芸に関するトピックスに関するエッセイなど、多様な情報提供についても未だ検討の段階である。それらの点の改善を目指すとともに、より一層の工芸館の周知のための工夫を重ねていききたい。

【計画を達成するために障害となっている点】

館外（インターネット）での公開については、独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システム(試行版)を早急に本版化することを目指す、それと同時に著作権処理への対応を検討していききたい。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領，完全学校週5日制の実施等を踏まえ，学校，社会教育関係団体と連携協力しながら，児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成，講座，ワークショップ等を実施することにより，美術作品等への理解の促進，学習意欲の向上等を促し，心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また，児童生徒を対象とした事業について，中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実 績

本館，工芸館とも児童生徒を対象にした事業としては，申し込みに基づく随時の講演や概説，展示案内等，展覧会の内容や対象年齢に合わせたきめ細やかな対応を心がけた。児童生徒だけでなく，その指導者である教員からの要望に対してもできるだけ対応し，こちらからも折にふれて積極的な働きかけを行って連携を強めた。

1. 本館

(1) 平成16年度の小・中・高校生の受け入れ

(ギャラリートーク，ガイダンス，修学旅行，職場体験等(随時))

小学校：4件(143名)

中学校：11件(281名)

高等学校：5件(36名)

* 小学校には，深谷市教育委員会生涯学習課アーティスト倶楽部，ガールスカウト千葉県第39団ジュニア部門を含む。

(2) 小・中・高校教員および教育関係者の研究会等への協力(講演，展示解説等)

7件(147名)

(荒川区中学美術部会，極東ロシア美術教育関係者グループ，東大和市公立中学校教育研究会美術部会，千代田区教育会美術部会，埼玉県伊那町教育研究会図工美術部会，文京区小学校教育研究会図工部，練馬区図画工作研究会)

(3) 小・中・高校教職員の研修会 1回

「ゴッホ展 教職員研修会」

日時：平成16年3月31日(木) 午後2時から(60分)

講師：保坂健二郎(研究員)

聴講者数：128名

(4) ボランティアによる小中学生向けプログラム

(「(8) ボランティアの活用状況」を参照)

「夏休み!こども美術館」(ギャラリートークおよび制作指導)

ア.小学生プログラム 4回(93名)

イ.中学生プログラム 6回(55名)

「春休み!こども美術館」(ギャラリートーク)

ア.小学生プログラム 4回(128人)

(5) 本館・工芸館・フィルムセンター共同スタンプラリー「KIDS MOMAT」

夏休み期間中にスタンプラリーを実施し、3館全てのスタンプを集めた応募者に景品を進呈した。応募者：79名

(6) 小・中学生向けセルフガイドの配布

「鑑賞のススメ・こども版」を夏休み中の来館児童に配布
「ゴッホ展セルフガイド」を、都内の小・中学校と来館児童に配布

(7) 外部講師によるギャラリートーク

「MOMATの絵をアレナスさんと鑑賞しよう」
日時：平成16年3月29日(火)午後3時から(110分)
講師：アメリカ・アレナス
聴講者数：35名(小学5・6年生)
共催：三井物産

(8) ホームページによる広報

当館の主要作品の図版・解説が掲載された「こどものページ」を設けた。

2. 工芸館

(1) 平成16年度の小・中・高校生の受け入れ実績は次のとおりである。

(大学生に関しては「(3)-2 大学等との連携」を参照)

中学校：3件(17人)

高校：3件(95人)

(2) ボランティアによる小・中学生向けプログラム

ボランティア導入に伴い、児童生徒を対象とした「こどもタッチ&トーク」を開始した。

(3) 小・中学生向けワークシートの配布

小学生を対象として、「所蔵作品展 動物のモチーフ」に関連したワークシート「たんけん！こども工芸館」を作成し、事前に学校等に配布するとともに、来館した小学生に配付し、鑑賞の一助となるようにした。ワークシートに、展示作品から一点選んで動物似顔絵を描くシートを添付し、「動物似顔絵大会」を実施した。子ども達の描いた似顔絵は2階展示ホールと休憩室に掲示、ならびにリングファイルでまとめて閲覧できるようにした。

(4) 小・中学生向けワークショップの開催

所蔵作品展「動物のモチーフ」の会期中、小・中学生を対象としたワークショップ(お面を作る)を開催した。外部講師(出品作家、陶芸家)の指導のもと、紙粘土でお面を作った。参加者：15人

(5) ホームページによる広報

当館ホームページ内に「こども工芸館」を設け、作品鑑賞のポイント、素材・技法の特性などを画像入りでわかりやすく解説した。

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：夏・春期休暇中の小・中学生を対象にした事業については、アンケートの満足度やリピート率を見ても概ね好評を博しており、プログラムとしての充実度が上がってきた結果であると考えます。また、本館及び工芸館では、学年単位、クラス単位での館の活動の概説、展示案内等の要請や、修学旅行時などに予約を受けた中学生への解説・案内を可能な限り受け入れるなど、きめ細やかな対応を心がけた。他には、実績欄に掲げた小・中・高校等の図画工作・美術工芸の教員からなる研究会に対して、館の活動や常設展・企画展の概説などを行い、美術館教育等について話し合う機会を持ったほか、ゴッホ展を皮切りに、年に数回「教職員研修会」を開始することとした。

工芸館：所蔵作品展「動物のモチーフ」に関連した児童・生徒向け事業は概ね好評で、ワークシートの配布、「動物似顔絵大会」とともに評判を呼び、結果として小・中学生の入館者が前年度の3倍強になった。また、作品に実際に触れることのできる鑑賞教室は、将来の工芸ファンを作る上で有効であると考えます。

【見直し又は改善を要する点】

本館：児童生徒を対象とした各種プログラムを、様々な方途を通じて、より一層周知に努める必要がある。具体的には、従来のホームページやメールマガジンのほか、学校や社会教育関係団体と相互理解を図り、連携協力を進めて行くことが重要である。各展覧会に際しての「教職員研修会」も、この点でますます重要となると思われる。

工芸館：夏休み企画、作品に触れる鑑賞教室など、一定の成果を見つつも、いまだ教育の現場に踏み込んだ広報活動がほとんど行われていない。このことが飛躍的に小・中学生の入館者を増やすことができない要因のひとつである。今後、教育現場への広報や連携方法について検討していきたい。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 本館

(1) 講演会 19回(年度計画記載回数: 20回)

- 開催回数 計19回
開催場所 本館講堂
参加者数 1,931人 1回平均102人(平成12年度実績 183人)
担当した研究員数 各回約2人(講演者含まず)
事業内容 各展覧会に合わせて、出品作家・当館研究員・外部の専門家等による講演を行った。

(2) ギャラリートーク 34回(年度計画記載回数: 33回)

常設展を対象としたギャラリートーク

ア. 研究員による所蔵品ガイド(所蔵品展ごと最初の土曜日)

- 開催回数 計5回
開催場所 所蔵品ギャラリー
参加者数 153人 1回平均31人
担当した研究員数 各回1人
事業内容 所蔵品展の見どころを解説

イ. 研究員によるハイライト・ツアー

(毎月第1日曜日無料観覧日、午前11時から50分程度)

- 開催回数 計13回
開催場所 所蔵品ギャラリー
参加者数 516人 1回平均40人
担当した研究員数 各回1人
事業内容 近代美術の流れを辿りながら、所蔵品の見どころを解説

ウ. 研究員によるフライデー・トーク

(月1回、金曜日、企画展開催時、午後6時から1時間以内)

- 開催回数 計11回
開催場所 所蔵品ギャラリー
参加者数 298人 1回平均28人
担当した研究員数 各回1人
事業内容 所蔵品に関して、テーマを絞った専門的解説

エ. 外部講師によるギャラリートーク

「アフターファイブに美術鑑賞」

- 開催回数 1回(平成16年3月29日(火)午後6時半から約2時間)
講師 アメリカ・アレナス
参加者数 66名

共催 三井物産
広報協力 文化庁（丸の内元気文化プロジェクト）
事業内容 美術館近隣で勤務する社会人を対象に、対話型ギャラリートークの専門家を招いて、所蔵作品展にて実施した。

企画展を対象としたギャラリートーク

開催回数 計4回
開催場所 企画展ギャラリー，ギャラリー4
参加者数 195人 1回平均49人（平成12年度実績 140人）
担当した研究員数 各回 約1人
事業内容 各展覧会の内容に合わせた研究員によるギャラリートークの実施。

ガイドスタッフによるギャラリートーク

(3) - 3 「ボランティアの活用状況」を参照。

(3) パフォーマンス

開催回数 計1回
開催場所 本館講堂
参加者数 146人
担当した研究員数 2人
事業内容 「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展に合わせて、ブラジル人パフォーマーも参加した「詩と映像によるパフォーマンス」を開催。

(4) 展覧会の開催に伴う無料コンサートの実施

開催回数 計1回（平成16年7月16日（金））
開催場所 本館エントランスホール
参加者数 200人
担当した研究員数 2人
事業内容 「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展に合わせて、ブラジル音楽のコンサートを実施。

(5) 「東京国立近代美術館コンサート」の実施

開催回数 計3回
開催場所 本館エントランスホール，講堂
参加者数 490人
事業内容 館の普及広報活動の一環として実施世界的に著名な演奏家を招き、コンサートを実施。

ア．ベルンハルト直樹ヘーデンボルク チェロ・リサイタル&トーク

実施年月日 平成16年7月14日（水）午後7時～
場 所 エントランスホール
参加人数 179人
内 容 数々の国際コンクールでの受賞歴を持つチェリストのトークとリサイタルを開催。参加者には開催中の「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展を通常の閉館時間後に特別公開

した。

- イ．邦楽の夕べ 錦秋の夜に贈る邦楽とお話のひととき
実施年月日 平成16年9月24日(金)午後7時～
場 所 講堂
参加人数 126人
内 容 俳優で長唄・三味線の名取でもある山口崇氏を迎え、「日本の音色に親しむ」と題する邦楽についてのトークと演奏。参加者には開催中の「琳派 RIMPA」展のチケットを配布。
- ウ．黒沼ユリ子 ヴァイオリンコンサート&トーク
実施年月日 平成17年2月17日(木)午後7時～
場 所 エントランスホール
参加人数 185人
内 容 世界的なヴァイオリニスト黒沼ユリ子氏のトークと演奏。参加者には開催中の「痕跡 - 戦後美術における身体と思考」展を通常の閉館時間後に特別公開した。

(6) アンケート結果

[常設展関係]

ハイライト・ツアー(回答数184件)

・良い 96.7%(178件)・普通 3.3%(6件)・悪い 0.0%(0件)

フライデー・トーク(回答数111件)

・良い 93.7%(104件)・普通 5.4%(6件)・悪い 0.9%(1件)

[企画展関係]

講演会

国吉康雄展(回答数97件)

・良い82.5%(80件)・普通16.5%(16件)・悪い4.5%(1件)

ブラジル:ボディ・ノスタルジア(回答数198件)

・良い82.4%(163件)・普通13.1%(26件)・悪い14.5%(9件)

草間彌生展(回答数53件)

・良い88.7%(47件)・普通11.3%(6件)・悪い0.0%(0件)

痕跡 - 戦後美術における身体と思考(回答数33件)

・良い81.8%(27件)・普通9.1%(3件)・悪い9.1%(3件)

ギャラリートーク

木村伊兵衛展(回答数12件)

・良い83.4%(10件)・普通16.6%(2件)・悪い0.0%(0件)

[東京国立近代美術館コンサート]

第1回(回答数60件/有効回答数58件)

・良い 94.8%(55件)・普通 5.2%(3件)・悪い 0.0%(0件)

第2回(回答数30件/有効回答数27件)

・良い100.0%(27件)・普通 0.0%(0件)・悪い 0.0%(0件)

第3回(回答数34件/有効回答数33件)

・良い 100.0% (33件) ・普通 0.0% (0件) ・悪い 0.0% (0件)

2. 工芸館

(1) 対談・座談会ほか (年度計画記載回数: 0回)

開催回数 計1回

開催場所 本館ギャラリー4

参加者数 83人

担当した研究員数 3人 (講師含む)

事業内容 「河野鷹思のグラフィック・デザイン」展に合わせ、専門家二氏による対談を行った。

(2) ギャラリートーク (年度計画記載回数: 33回)

常設展を対象としたギャラリートーク

開催回数 計17回

開催場所 展示室

参加者数 403人 1回平均23.7人

担当した研究員数 各回1人 (トーク講師含む)

事業内容 各展覧会に合わせ、当館研究員、作家によるトークを行った。

企画展を対象としたギャラリートーク

開催回数 計16回

開催場所 企画展展示室

参加者数 773人 1回平均48.3人

担当した研究員数 各回約1人 (トーク講師含む)

事業内容 各展覧会に合わせ、出品作家や当館研究員、外部の専門家等によるトークを行った。

(3) アンケート結果

[常設展関係]

ギャラリートーク (回答数193件)

・良い 77.1% (147件) ・普通 20.0% (40件) ・悪い 2.9% (6件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：講演会、ギャラリートーク共に、展覧会の内容に即して幅広い主題によるプログラムを組み、「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展における12回の連続講演会等、積極的な取組みを行った。また、常設展のギャラリートークについては、参加者のアンケート結果や意見に基づいて、その動機や目的の多様性、知識や経験の違いに対応すべく日時・内容の異なる3種の解説プログラムを設定した。なお、米国の美術館教育の専門家、A・アレナス氏による社会人向けプログラムは、普段美術館に足を運ぶことの少ない社会人層に特化したプログラムとして有意義であった。

コンサートについては、参加者にとって、世界的にも著名な演奏者と間近に接することができる稀な機会となり、また、展覧会のテーマとのマッチングにより来館者に芸術に対するより深い親しみを提供することで、美術館としての新たな役割を探る良い試みとなった。

工芸館：平成16年度のギャラリートークは、開催回数が多いと、一回の参加者数が減るという傾向が見られた

為、回数を絞り、その分各回のテーマを連動させ、同一の展覧会を様々な角度から理解しうるような構成にした。

【見直し又は改善を要する点】

本館：平成16年度の講演会等の事業は、企画展に連動した講演会（於講堂）と、コレクションの展示に連動したギャラリートーク（於所蔵品ギャラリー）の2本立てで実施されたが、講演会は、講演内容や講演者によっては聴講希望者が講堂の収容定数を越えるため、事前申込み制（抽選制）とせざるを得ない。今後も、円滑な講演会等の実施のためには申込み制を周知徹底するなど、告知や募集の方法を検討したい。

コンサートを通じて美術館への理解を深めてもらう事業、また、リピーター増進を目的とした普及広報事業の一環として、今後も定期的にコンサートを開催するためには、チケット価格の低廉化を図り、展覧会など美術館との関連性を持たせるなど、参加者にとって魅力ある企画とする必要がある。さらに、企画の広報についても検討する必要がある。

工芸館：このところ、ギャラリートークの参加者が増加傾向にあり、関連資料の掲示が見にくかったり、語り手の声が届かなかったりなどの問題が起こっている。今後はプロジェクターなどを使用して大きな映像を用いたり、スピーカーを用いたり、トークの内容とともに、実施方法についても工夫が必要とされるところである。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討，実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し，専門性を高めるための研修を実施し，人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに，情報交換，人的ネットワークの形成に努める。

実 績

学芸担当職員（キュレーター）研修について

キュレーター実務研修

平成16年度は，受け入れなし。

自己点検評価

【見直し又は改善を要する点】

キュレーター実務研修は，美術館等で既にしかるべき学芸員経験を積んだ者を対象者として想定しているが，各美術館とも必ずしも満足すべき学芸員数を擁していないのが現状であるため，そうした学芸職員を数ヶ月に渡って東京に派遣・駐留させることは，派遣する側にとって予算面，人員面で大きな負担となっている。

今後の可能性として，展覧会開催などに際して国公私立美術館が連携する機会はむしろ増えており，特定の展覧会プロジェクト等との関連で，受け入れ側と派遣側双方にとって現実的な実務研修の方法や機会を探るなど，検討が必要と思われる。

(3) - 2 大学等との連携

実績

1. 博物館実習生

(1) 本館

受入期間 平成16年8月23日～平成16年8月27日(5日間)

開催場所 本館(会議室・アトライブラリ・所蔵品ギャラリー)

参加者数 9人(前年度実績8人)

担当した研究員数 11人(受入れ担当1, 講義等10)

事業内容 講義・館内見学・ギャラリートーク実施・展覧会案立案など。

特記事項 「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設定。実習として、最終日に所蔵作品のギャラリートーク(解説)を行った。

(2) 工芸館

受入期間 平成16年8月23日～平成16年8月27日(5日間)

開催場所 工芸館(会議室)

参加者数 4人

担当した研究員数 7人(客員研究員を含む)

事業内容 講義, 館内見学, 作品取り扱いなど。

2. その他の連携・協力

(1) 本館

大学, 生涯学習施設等の授業への協力(講演会, 展示解説等を実施)

ア. 大学授業, 学会等への協力 6件(196人)

女子美術大学短期大学(2件), 女子美術大学, 多摩美術大学, 武蔵野美術大学, 中央大学

イ. 生涯学習施設等への協力 11件(312人)

相模原市民ギャラリー学生ボランティア, 市川市美術館を読む会(2件), 津久井町民大学グリーンカレッジつくい, 習志野市袖ヶ浦公民館寿学級, 所沢市民大学, (社)北沢法人会, 中央大学三十年会, 慶応婦人三田会, 東京三菱銀行社会貢献室, 世田谷ARTLOVERS

(2) 工芸館

ア. 校外授業としての作品熟覧 7件

東京藝術大学陶芸教室(3件), 武蔵野美術大学芸術文化学科, 東京芸術大学彫金教室, 多摩美術大学工芸学科染織専攻, 多摩美術大学工芸学科金属専攻

イ. 制作者の研究のための熟覧を実施 1件

石川県立輪島漆芸技術研修所

自己点検評価

【良かった点, 特色ある取組み】

本館: 博物館実習については, 講義や館内見学等により美術館の仕事の全体像を伝えるとともに, 特に「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設け, 各実習生によるギャラリートークの模擬演習を研修プログラムに組み入れた。これにより, 実習生には, 実習に主体的に関わってもらうことができ, また, 作品と来館者をつなぐという美術館の重要な役割を実践的に学んでもらうことができた。参加学生の満足度も高く, 一定の成功を収めたと考える。

工芸館：工芸科学生による熟覧は、将来の工芸家が名品の実作に触れて、いわば学外授業を行うようなものであり、将来の工芸ファンや今後の日本の工芸の担い手を育てるという意味でも、意義のある活動である。

【見直し又は改善を要する点】

本館：博物館実習や授業への協力とは別の形で大学との連携を図る方途としては、玉川大学芸術学部との間で同大学のインターンシップ制度の受け入れなど、実施に向けての協議を開始した。

工芸館：今後も、展覧会の企画内容に即した熟覧や個別のギャラリートークを通じて、大学のカリキュラムとの連携を築けるよう、アプローチを継続し、未だ大学等の学生に広く浸透していると言えない工芸館の事業をアピールする必要がある。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 本館

(1) 登録人数 20名

(2) 所蔵品ガイド 247回(参加者:3,005名)

(3) 児童生徒へのガイド 20回(参加者:460名)

((4)「児童生徒を対象にした事業」参照)

(4) その他のガイド 4回(参加者:115名)((7)「大学等の連携」参照)

(5) 活動内容

常設展開館日の午後2時より約1時間、来館者との対話を交えながら、所蔵作品についてのギャラリートークを行った。また、春夏の「こども美術館」や学校からの申し込みに対して、小・中学生へのギャラリートークや制作指導を行った。常設展の展示替えごとに例会を開催し、研究員の展示に関する講義を受け、その時々の問題点等について協議しながら、トーク・プログラムを運営した。9、10月には担当研究員により個別にトーク指導と面談を行ったほか、フォローアップ研修として「写真作品の鑑賞について」(当館研究員による)、「彫刻鑄造の諸技法」(台東区立朝倉彫塑館学芸員・村山万介氏、有限会社櫻井美術鑄造・櫻井淳一氏による)を行った。

(6) アンケート調査

所蔵品ガイド(回答数65件)

・良い 65.0%(63件)・普通 34.0%(33件)・悪い 1.0%(1件)

2. 工芸館

(1) 登録人数 19名

(2) タッチ&トーク 69回(参加者:タッチ902名・トーク966名)

(3) こどもタッチ&トーク 5回(参加者:63名)

((4)「児童生徒を対象にした事業」参照)

(4) 英語タッチ&トーク 2回(参加者:14名)

(5) 活動内容

開館日の毎水曜日と土曜日、午後2時からの約60分間でタッチ&トークを実施した。事前のガイドプランに応じ、1階会議室に並べた展示に係る作品や資料に実際に触れながらのトークと、会場で来館者との対話を交えながら展示作品を前にしたギャラリートークを実施した。また、「どきどき!こども工芸館」と称して、夏休み中2回と、特別展「非情のオブジェ」開催中、各回約60分間で、幼児から小学生を年齢でグループ分けをして実施。また、かねて要望があった英語による同様のガイドをの2回実施した。展示ごとに内容等に関する担当研究員のレクチャーを行い、さらに各種のタッチ&トークに応じた綿密な打ち合わせとリハーサルを行い対応した。

(6) アンケート調査

タッチ&トーク(回答数160件)

・良い 76.3%(120件)・普通 21.5%(36件)・悪い 2.2%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：1日も中止することなく、常設展開催中、毎日所蔵品ガイドを実施した。活動開始より2年目を迎えてギャラリートークの内容も安定・充実し、対話式の解説スタイルは、当館の特色あるプログラムとして定着した感がある。所蔵品ガイド以外でも、子ども対象のトークなど、ボランティア各人が得意な分野で臨機応変に対応できるようになってきている。

また、工芸館ガイドスタッフや国立西洋美術館の解説ボランティアが、フォローアップ研修に参加したり、こども美術館を見学したりするなど、ボランティア養成・研修に関して独法内での連携・協力を試みた。他には埼玉県立近代美術館、水戸芸術館のボランティアと交流を行った。

工芸館：工芸館ならではの企画として、ギャラリートークにあわせて作品や資料を並べたタッチコーナーを設けた。

会場の展示作品とタッチコーナーで触れる作品及び資料が関連付けられることによって、来館者とのトークに活気が出た。また、専門性の高い工芸に対する鑑賞のポイントを分かりやすくガイドして工芸への関心と理解とが深められたと思われる。ガイドスタッフの各自が、展覧会に応じた工芸課研究員や外部講師によるギャラリートークに積極的に参加し、ディスカッションを重ねるなど、活動意欲にも積極的な姿勢が現れている。そうした成果が、幼児から小学生を対象としたこどもガイドや英語ガイドに対しても十分に示された。

【見直し又は改善を要する点】

本館：活動内容の多様化などにより、現在の登録人数20名ではやや負担が大きくなってきており、次年度には若干名を追加募集する必要がある。また、優秀なボランティアの生活環境の変化等による離脱を防ぐためにも、一定期間内であれば活動を休止できる制度を新設するなど、ボランティア活動を継続しやすい体制を整えていく必要がある。

工芸館：工芸課の研究員との協働とボランティアの熱心な研修及び学習意欲によって、円滑な活動が図られるようになってきた。さらに、来館者への普及と広報に努めることで、よりコンスタントに参加者を確保し、また、トーク等の活動内容を常々に点検するなどして、向上に努めたい。あわせて、展示作品の鑑賞に応じた教材や資料の準備とその充実を図る必要がある。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 企業等との連携

(1) 本館

「国吉康雄」展	協力：日本航空
「ブラジル：ボディ・ノスタルジア」展	特別協賛：hawaiians 協賛：TOYOTA 松下電器産業株式会社
	協力：ヴァリグブラジル航空
「琳派 RIMPA」展	協力：日本航空 JR東日本
同国際シンポジウム	助成：ポーラ美術振興財団
「木村伊兵衛」展	協力：特殊製紙株式会社
「痕跡 戦後美術における身体と思考」展	協力：資生堂 日本航空

(2) 工芸館

「伊砂利彦」展（平成17年度開催予定） 協賛：清流会

2. 賛助会員制度

平成16年度より、一層充実した事業を展開するために、自助努力をするとともに広く外部団体等からの支援・支持を受け、運営基盤の確立を図ることを目的に賛助会員制度を発足した。賛助会員への特典として、会員証の発行(国立美術館の所蔵作品展を随時観覧)、出版物への社名掲載、講堂・エントランスホール等施設の利用、特別内覧会・企画展への招待等を設けた。平成16年度中に4社8口の入会があった。

募集対象：東京国立近代美術館の事業に賛同する団体

会員期間：入会日より1年

募集開始：平成16年10月1日

会費：一口50万円

会員・オーディージャパン株式会社 5口

・りそなカード株式会社 1口

・セイコー株式会社 1口

・株式会社二期リゾート 1口

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：海外からの作品借用等を伴う「国吉康雄」展以下4つの展覧会に際して、航空会社の協力を得て輸送経費の減免を得たほか、「琳派 RIMPA」展に際しての国際シンポジウムにおいては、ポーラ美術振興財団から助成を受けた（詳細は「展覧会の状況」参照）。

また、草間展に際しては、りそなカード株式会社の発行するカードに同氏の作品が登用されたのを機縁に、同社と連携してりそな銀行各支店にポスター等を掲示した。

賛助会員制度では、寄付金収入として400万円が入り、また、会員特典として、施設利用があがった。これにより、美術館の認知度といった、普及広報の面で効果があったと考える。

工芸館：「伊砂利彦」展（平成17年度開催）に関して清流会（京都の染色振興団体）から100万円の助成金

を得た。

【見直し又は改善を要する点】

本館：日本航空（JAL）からは、作品の国際輸送費や海外からの招聘費について、これまでもたびたび経費を減免する形で協力を得ているが、今後は他の企業とも一定程度恒常的な連携・協力関係を築くべく、その可能性を探る必要があると考える。

賛助会員制度については、今後、さらなる会員の増加のための広報と、現会員の引き続きの加盟への働きかけ等の方策を検討していく必要がある。

工芸館：一般的に工芸展での資金的な助成を得るのは困難だが、これからはその可能性を追求していく必要がある。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等

(1) 本館

障害者トイレ	3箇所(1階 1箇所, 2階 1箇所, 地下1階 1箇所)
障害者エレベータ	2基
段差解消(スロープ)	2箇所(正面玄関)
貸出用車椅子	6台(1階)
貸出用ベビーカー	3台

(2) 工芸館

障害者トイレ	1箇所(1階)
障害者エレベータ	1基(1階)(障害者対応ではない)
スロープ	1箇所(正面玄関)
リフト	1基(正面玄関)
貸出用車椅子	3台(1階)
貸出用ベビーカー	1台

2. 観覧環境の充実

(1) 「国吉康雄」展

音声ガイド	日本語
貸出期間	平成16年3月22日～5月16日
貸出件数	2,025件(利用率5.43%)
	平成16年度中: 1,826件(利用率5.46%)

(2) 「琳派 RIMPA」展

音声ガイド	日本語
貸出期間	平成16年8月21日～10月3日
貸出件数	17,354件(利用率10.42%)

(3) 「ゴッホ展 孤高の画家の原風景」

音声ガイド	日本語
貸出期間	平成17年3月23日～5月22日
貸出件数	平成16年度中: 6,183件(利用率14.0%)

3. 夜間開館等の実施状況

(1) 夜間開館実施状況(本館のみ)

ア. 開催日数	47日間
イ. 入館者数	23,682人(総入館者数 520,302人, 入館者率4.55%)
ウ. 実施内訳	「常設展」47日間

入館者数 10,371人(総入館者数195,831人,入館者率5.30%)
「国吉康雄」展 7日間 平成16年度中
入館者数 1,663人(総入館者数33,450人,入館者率4.97%)
「ブラジル:ボディ・ノスタルジア」展 7日間
入館者数 781人(総入館者数11,922人,入館者率6.55%)
「琳派 RIMPA」展 6日間
入館者数 7,119人(総入館者数166,524人,入館者率4.28%)
「木村伊兵衛展」 10日間
入館者数 1,945人(総入館者数27,238人,入館者率7.14%)
「草間彌生 永遠の現在」展 8日間
入館者数 1,660人(総入館者数31,961人,入館者率5.19%)
「痕跡 戦後美術における身体と思考」 7日間
入館者数 529人(総入館者数9,332人,入館者率5.67%)
「河野鷹思のグラフィック・デザイン」展 7日間
入館者数 837人(総入館者数12,147人,入館者率6.89%)
「ゴッホ 孤高の画家の原風景」展 3日間 平成16年度
入館者数 1,559人(総入館者数44,044人,入館者率3.54%)

(2) 小中学生の入場料の低廉化

昨年度に引き続き、平成16年度開催の共催展についても共催者の協力を得て、小・中学生の観覧料金の無料化を実施した。

(3) (2) 以外の入館料への取り組み

ア. 当館主催の企画展における入館料割引

当館が主催する展覧会において、ホームページ、展覧会チラシ、割引券、栞(外部委託)等に割引引換券を付し、入館料割引を実施した。

利用実績 本館	「ブラジル:ボディ・ノスタルジア」
	利用率: 16.0%(対有料入館者) 9.6%(対総入館者)
	「草間彌生 永遠の現在」
	利用率: 16.7%(対有料入館者) 11.8%(対総入館者)
	「痕跡 戦後美術における身体と思考」
	利用率: 12.4%(対有料入館者) 8.4%(対総入館者)
工芸館	「非情のオブジェ 現代工芸の11人」
	利用率: 8.3%(対有料入館者) 3.5%(対総入館者)
*参考	「国吉康雄」
	利用率: 16.5%(対有料入館者) 10.5%(対総入館者)
	「琳派 RIMPA」
	利用率: 20.1%(対有料入館者) 13.9%(対総入館者)
	「ゴッホ」平成16年度中
	利用率: 16.5%(対有料入館者) 12.5%(対総入館者)

イ. 「ぐるっとパスGRUTT2004」

東京の美術館・博物館等共通券2004実行委員会に参加し、入場料金の低廉化を図った。具体的には、都内の美術館、博物館、動物園など44機関が加盟し、2ヶ月以内であれば、2,000円で全ての参加機関に入場できるチケット(通常料金であれば、約15,000円相当)の企画「ぐるっとパスGRUTT2004」に、常設展入場券に企画展割引券を加えて参加した。なお、次年度においては、チケットの価格は2,000円据え置きで、参加機関が46館に増える。当館も引き続き常設展入場券に企画展割引券を加え

て参加する。

バス利用者	本館	3,092人	企画展割引	1,620人
	工芸館	1,690人	企画展割引	207人
	*参考	フィルムセンター		2,349人

ウ．ウエルカムカード

東京都からの協力依頼による「ウエルカムカード」に参加し、外国人来館者の常設展入館料を割引した。「ウエルカムカード」は外国人旅行者を対象とした入場料金の割引サービスであり、都内の美術館・博物館・動物園等が参加している。ガイドブック・マップなどを7カ国語で作成し、空港・観光案内所・ホテル等の宿泊施設を対象に375,000部を配布するもので、広報効果も高いと考える。

カード利用者	本館	228人(外国人総入館者数	9,620人)
	工芸館	86人(外国人総入館者数	4,459人)

エ．企業との連携企画

東京地下鉄株式会社及び小田急電鉄株式会社との提携により「メトロ1日乗車券」等利用者の、常設展(一般のみ)及び特別展(一般、大学、高校)入館料を割引料金とした。「メトロ1日乗車券」等は、東京地下鉄株式会社が小田急電鉄株式会社と提携する事業で、東京メトロ・小田急線の全駅にポスターを掲出、チラシを配付しており、広報効果も高いと考える。

「草間彌生」展の開催中に、りそなカード株式会社と提携し、草間彌生デザインのカード提示による入館料割引を実施した。また、りそな銀行会報誌に展覧会情報を掲載、都内支店(300箇所)にポスター、チラシを配付する等、広報効果も高いと考える。

朝日広告社との提携により、朝日新聞社が発行する週間朝日百科「日本の美術館を楽しむNO.16」に常設展「割引クーポン券」を掲載。当館施設を特集したもので、広報効果も高いと考える。

(4) その他の入館者サービス

特別(共催)展開催に際し、従来のチケット委託販売に併せ、当館券売所においても前売りを実施し、来館者へのチケット購入の利便性の向上を図った(「国吉康雄」展、「琳派 RIMPA」展、「ゴッホ」展で実施)。また、ゴッホ展においては、期間限定の前売りペアチケットを発行した。

常設展フロアプラン(会場ガイド)について、日・英の二カ国語版に加え、(財)東芝国際交流財団の助成を得て、独・仏・中・韓の4カ国語版を作成し、外国人来館者へのサービス向上に努めた。

これまでの毎月第1日曜日の常設展及び文化の日(特別展も含む)に加え、平成16年度は、5月18日「国際博物館の日」常設展観覧料金を無料とし(工芸館のみ)、好評を得た。

「国際博物館の日」の来館者にポストカードセットを進呈する等の来館者サービスを実施し、リピーター増進に努めた。

企画展(共催)の開催に際し、東京駅よりシャトルバスを運行し、来館者への交通の便宜を図り好評を得た。

・「琳派 RIMPA」展(丸の内シャトルバスと提携)土曜・日曜・祝祭日に運行。

・「ゴッホ展」(バス借上げ、2台で運行)会期中の開館日に運行。

4. 一般入館者等の要望の反映

来館者のアンケート結果を踏まえ、また、近隣通行者等に対する広報として、管理者である環境省に働きかけ、北の丸公園入り口の案内板を大きく内表示を明瞭化したものへのリニューアルを行い、本館から工芸館への誘導案内に工夫をした。

かねてより要望の多かった、飲料の自動販売機については、前年度の本館4階休憩室への設置に引き続き、本館券売所横及び工芸館前庭に設置し、来館者へのサービス向上を図った。(工芸館利用者数は月平均500件)

北の丸公園周辺という立地条件を踏まえ、来園者が多い四月上旬及びゴールデンウィーク中の月曜日を閉館した。また、年末年始については、従来休館日であった12月28日、1月2日、3日(月曜・祝日)を開館日とし、来館者の利用機会の増進を図った結果、多数の来館者があった。

年末年始開館日の入館者数：

本館 206人(28日)、986人(2日)、268人(3日)

工芸館 172人(28日)、2,239人(2日)、222人(3日)

企画展（共催）の開催に際し、月曜休館日を開館することで、来館者の利用機会の増進を図った結果、多数の来館者があった。

「琳派 RIMPA」展（会期：平成16年8月21日～10月3日）

計 12,547人

内訳 1,191人(8/23), 1,245人(8/30), 1,348人(9/6),
6,073人(9/20), 2,690人(9/27)

「ゴッホ展」(会期：平成17年3月23日～5月22日)

平成16年度中計 3,259人(3/28)

企画展（共催）の開催に際し、木曜日に夜間開館を実施することで、来館者の利用機会の増進を図った。常設展会場内の撮影について、平成16年度より希望者からの申請による許可制を導入し、好評を得ている。

申請者数	美術館	4,205人
	工芸館	387人

5. レストラン・ミュージアムショップ等の充実

本館ミュージアムショップについては、共催展の関連グッズはもとより、当館主催の特別展・企画展に伴う展覧会の関連書籍コーナーを設けるなど販売品の充実に努めた。また、当館所蔵作品をモチーフにしたグッズ（ハンカチ等）の開発販売に努めた。

工芸館では、狭隘なスペースの中、関連書籍、雑誌、現代作家による陶芸作品を販売し、特に「非情のオブジェ 現代工芸の11人」展開催時には、出品作家の執筆書籍、作家制作のガラス作品、染織作品及び作家デザインの陶器を販売するなど、展覧会の特色を活かした販売物の充実に努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

常設展のアンケートを実施するに当たっては、企画展との開催期間を考慮し情報を収集するため、年間2回の調査を実施した。また、多様化する来館者のニーズに対応するため、より詳細な情報を収集し、展示内容・講演会等についても調査項目の細分化を図った。工芸館の企画展開催に際し、関連する学校・教育施設等の関係者との懇談会を開き、展覧会の趣旨・目的を説明並びに意見交換等を行うなどの広報活動から来館者の増加に努めた。

また、工芸館ではエントランスから中央階段の踊り場、2階のロビーに至る来館者の最も基本的なアプローチ部分の改装計画を立て、平成16年度は踊り場から2階ロビー部分の改装を実施した。踊り場のガラス窓の装飾、チラシ等の情報コーナー、アンケート記入や子供企画の似顔絵描きなどの使える机と椅子のセットなどが新しく整えられ、来館者がより快適な環境で鑑賞できるようになった。

【見直し又は改善を要する点】

平成16年度は、年末年始の閉館期間を縮小、琳派展やゴッホ展における開館日拡大、ゴッホ展での木曜日の夜間開館実施等、より多くの観覧機会の提供に努めたが、次年度においても、特に多数の来館者が見込まれる展覧会開催に際しては、混雑緩和の観点からも、開館時間については柔軟な対応をすることに努めたい。外国人来館者への対応として、フロアプラン（会場案内）などの会場配布物やギャラリーガイド等の販売書籍の英語版作成等、外国人来館者への受け入れ態勢の充実に努める必要がある。